

## 随想 「野の花、空の鳥を見よ！」

森山 昭雄

### まえがき

新約聖書にあるイエスの言葉は、私たちの心に突き刺さるような内容に満ち溢れています。もちろん慰めの言葉もあるのですが、謎めています。長年聖書に親しんできたにもかかわらず、わたしはイエスの発した言葉の意味を十分に探り当てることが出来ません。2000年も前のユダヤ地方に生きたイエスの言葉は、生前のイエスによって書かれてものではなく、弟子たちあるいはずっと後代の福音書記者によって書かれたものであり、元の話の多くは口伝伝承です。その上、聖書の原本は残されていないで、写本から翻訳されています。数多くの写本によっても少しずつ表現が違います。その間に多くの解釈が加わっていますので、謎めています。当り前なのかもしれません。

イエスが残したとされる多くの言葉の中で、わたしがもっとも感動しているのが、「野の花、空の鳥を見よ！」という言葉です。イエスは、「神の国は近づいた、悔い改めて福音を信ぜよ！」という言葉で宣教を開始しました。イエスの宣教の新しさは、「神の国」の到来を告げたことにあります。「神の国」とは、「神が支配しておられる」ということです。イエスがこのことを発見したのは、まさに「野の花、空の鳥」を観ることによって得られたのではないかと思っています（詳しくは本文の中で）。

この小文は、この聖書の言葉から思い巡らしたことを、わたしの言葉で表現してみました。書き始めてみて、自分の言葉で表現することがいかに難しいか、ということを実感しました。でも今の時点で自分の考えたことを文章にしてみることは、わたしの今の到達点を記録するという意味はあるだろうと思い、書き始めたわけです。聖書学や神学の素人が書くのですから、間違いなどたくさんあるかもしれません。この聖書の箇所言葉から、キリスト者として、感じたままに、気楽に書いた随想です。気楽に読んでみてください。

言い忘れました。わたしは、日本キリスト教団岡崎茨坪伝道所に所属する一信徒です。現在 68 歳。愛知教育大学で自然地理学の研究と教育をし、5 年ほど前に定年退職し、今は旧作手村で隠居の生活をしています。若い頃から、流域下水道終末処理場建設のために農地を奪われる農民たちへ支援活動、管理教育で人権を侵害されていた子どもたちを支援する市民運動、愛知万博会場建設による自然破壊を食い止めようとした自然保護運動などを行ってきました。一見、内容的には関連性がない別々の運動のように見えますが、わたしの中では一貫しているつもりです。そのことは本文を読み進むうちにお分かりいただけたらと思います。

「野の花、空の鳥を見よ！」という聖書の箇所を、次に載せておきます。以下、特別の断りが無い限り、聖書の引用は新共同訳聖書を用いました。

## 《新約聖書》 ルカによる福音書 12：22～31

それから、イエスは弟子たちに言われた。「だから、言うておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。あなたがたは、鳥よりもどれほど価値があることか。あなたがたのうちのだれが、思ひ悩んだからといって、寿命をわずかでも延ばすことかできようか。こんなごく小さいことでさえできないのに、なぜ、他のことまで思ひ悩むのか。野原の花がどのように育つかを考えてみなさい。働きもせず紡ぎもしない。しかし、言うておく。栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。まして、あなたがたはなおさらのことである。信仰の薄い者たちよ。あなたがたも、何を食べようか、何を飲もうかと考えてはならない。また、思ひ悩むな。それはみな、世の異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存じである。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる。

(新共同訳聖書より)

## 目 次

### まえがき

#### I イエスの自然観

- ★ 自然の美しさは、神様が造った！
- ★ 野の花を見よ！
- ★ カラスを見よ！
- ★ 「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」

#### II 環境破壊とキリスト教の責任

- ★ 人間中心の自然観からの解放
- ★ 環境破壊とキリスト教
- ★ 「ノアの洪水物語」のもう一つのメッセージ

#### III 「思い煩い」からの解放

- ★ 「思い煩い」から解き放たれる
- ★ 生命保険は必要ない？

#### IV イエスが発見した「神」と「神の支配」

- ★ イエス時代のユダヤ教
- ★ 洗礼者ヨハネの説教
- ★ 悔い改めとは？
- ★ 「放蕩息子のたとえ」が語る神
- ★ もう一人の放蕩息子

## V イエスの死が意味すること

- ★ 洗礼者ヨハネとの決別
- ★ マルコのメッセージ、新しい酒は新しい皮袋に
- ★ 「原罪」なんてあるの？

## VI イエスの十字架の死の意味

- ★ それでも「罪」があるわたしたち
- ★ 弟子たちの発見、イエスの死は贖罪の死だった！
- ★ イエスの十字架は、人間の罪の深淵を暴露している

## VII 関係の中で生かされてある<いのち>

- ★ イエスの発見、「神の支配」、生かされてある<いのち>
- ★ 失われた<いのち>を回復させるために

## VIII 十字架を負ってイエスに従う、とは

- ★ 律法は人のためにこそある、「行って、あなたも同じようにしなさい」
- ★ 「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれた」こと
- ★ 「貧しい人々は、幸いである」
- ★ 市民運動を担うということ
- ★ 「ただ、神の国を求めなさい」

あとがき

参考文献

## I イエスの自然観

### ★ 自然の美しさは、神様が造った！

「野の花、空の鳥を見よ！」 ああ、何という牧歌的な美しい響きを持った言葉でしょうか。新緑の山の美しさを背景に、美しい野の花が咲き乱れる光景と、山々に澄んだ声でこだまする空の鳥のさえずり。イエスが住んでいたイスラエルのガリラヤ地方も、きっと美しい自然があったに違いありません。いつかガリラヤを含めた聖地旅行をしたいと思っているのですが、政治情勢が緊迫していてなかなか行く気になりません。

ところでわたしは、5年ほど前から作手村（愛知県の東の方の高原の村、現在新城市）の田舎に住んでみて、初めて田舎の自然の美しさを感じ入り、驚きを感じてきました。特別に貴重な植物ではなくても、野の花は実に美しいのです。身の回りにある雑草の花でも、よく見ると実に美しいのです。今、私の家の庭には、カボチャ、冬瓜、ゴーヤー、トマト、ニラの花が咲いています。あまりにありふれているので、注意して目を凝らして見ないだけで、よく見れば美しいものです。

森の樹木も、美しいですね。一つ一つの樹木も、春や夏に花を咲かせ、秋には実がなります。普段は目立たないのに、花が咲くと、樹木自身が「僕はここにいるよ！」と自己主張をしているようにも見えます。それぞれが美しいのです。新緑の頃の山は、驚くほど美しさを持っています。紅葉

の頃の山は、錦織なす色彩は驚嘆するほどの美しさです。ましてや、めったに見られない貴重種の花、それに出会うだけで興奮してしまいます。

動物もそうです。鹿や猪などの大型の動物はめったにお目にかかることはありませんが、時たま野山で見かけると驚きと感動が広がります。チョウや虫などの昆虫は、実に美しい姿をしています。アサギマダラ、オオムラサキ、ギフチョウを見たときは、あまりの美しさに興奮がさめやらなかったです。僕らが住んでいる場所に飛んでくる小鳥たち、たとえば、シジュウカラ、ヤマガラ、オオルリ、セグロセキレイ、キセキレイ、アオサギ、ダイサギなど、それぞれ惚れ惚れするほどの美しさであり、そのさえずりもきれいです。

今わたしは、写真に凝っています。それは、その花々や自然の美しさを切り取っておきたいという思いからです。写真は被写体を忠実に再現してくれますので、ただだけでは気がつかない新しい発見があります。自然の新しい世界が広がったように感じています。今は、カメラの性能はよくなり、デジタル一眼レフがあれば、すばらしい写真を撮ることが出来ます。それで撮影した写真をパソコンで大きく引き伸ばしてプリントし、額に入れると、より美しく見えます。我が家の壁は写真で一杯です。そうするのは、それぞれの写真を撮影したときの感動がよみがえるからです。

作手に定住して数年立ちました。ところで、人はしばしば風光明媚なところを旅します。僕も旅が大好きで、これまでも国内外を問わず、いろいろな場所に旅をしました。しかしそれは、その季節の瞬間の美しさを感じるだけです。ところが住むということは、その自然の中に一年を通じて身をおいてみるということです。そうすると、それまでに気づけなかった自然の美しさを感じ入ることがあります。いわば旅が気まぐれな不定期な観測だとすれば、定住するということは定点観測のようなものです。季節の移ろいを植物の変化に感じたりして、次々と新しい発見があるのです。

わたしは、撮影した自然の写真を材料に、この地方の自然を紹介するブログを立ち上げています。6年も続いていますので、気が向いたら下記の URL にアクセスしてみてください。「雑木林」「作手」をキーワードで検索してもすぐに見つかると思います。

田舎の雑木林で遊ぶ <http://coppice2.blog19.fc2.com/>

かくしてわたしは、美しい自然に接するうちに、これこそ神が造られたと思わざるを得ない思いにさせられてきました。このブログは、神への賛歌のつもりで書いています。

## ★ 野の花を見よ！

旧約聖書創世記の始めに、天地創造の神話が出てきます。重要なので第一章の全文を掲げておきましょう。

### 創世記第一章◆天地の創造

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良

しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ。」神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった。神は大空を天と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第二の日である。神は言われた。「天の下の水は一つ所に集まれ。乾いた所が現れよ。」そのようになった。神は乾いた所を地と呼び、水の集まった所を海と呼ばれた。神はこれを見て、良しとされた。神は言われた。「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」そのようになった。地は草を芽生えさせ、それぞれの種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける木を芽生えさせた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第三の日である。

神は言われた。「天の大空に光る物があって、昼と夜を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。天の大空に光る物があって、地を照らせ。」そのようになった。神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせられた。神はそれらを天の大空に置いて、地を照らせ、昼と夜を治めさせ、光と闇を分けさせられた。神はこれを見て、良しとされた。夕べがあり、朝があった。第四の日である。神は言われた。「生き物が水の中に群がれ。鳥は地の上、天の大空の面を飛べ。」神は水に群がるもの、すなわち大きな怪物、うごめく生き物をそれぞれに、また、翼ある鳥をそれぞれに創造された。神はこれを見て、良しとされた。神はそれらのものを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、海の水に満ちよ。鳥は地の上に増えよ。」夕べがあり、朝があった。第五の日である。神は言われた。「地は、それぞれの生き物を産み出せ。家畜、這うもの、地の獣をそれぞれに産み出せ。」そのようになった。神はそれぞれの地の獣、それぞれの家畜、それぞれの土を這うものを造られた。神はこれを見て、良しとされた。

神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。

「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。

神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

(創世記第1章 1～31)

ここでは、この神話の詳細については触れません。この神話では、神は、光と闇、海と陸地、大空、太陽・月・星、植物、海の魚、空の鳥、家畜、地に這うもの、というふうに自然のあらゆるものを造っていきませんが、それぞれを造るたびに「神はこれを見て良しとされた」と述べます。その

最後に人間を創造されます。そして、その最後の 31 節に「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」と記されています。神が創造されたもの、人間を含めたすべての自然は「極めて良く」創られたのです。われわれが自然と接するときを感じる驚きは、神の創造の美に由来するのだ。

イエスは、「野の花を見よ！」と言いました。聖書学者によれば、それはアザミではないか、と言います。わたしが住んでいる作手村にもアザミがたくさん生えています。湿地に生えるアザミは、キセルアザミ（別名マアザミ）と言って実に美しいのです。そしてイエスは、＜栄華を極めたソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。今日は野にあって、明日は炉に投げ込まれる草でさえ、神はこのように装ってくださる。＞と言いました。アザミの美しさにイエスが感動したのが分かるような気がします。ソロモンとは、古代イスラエル王国の三代目の王様（約三千年位前）で、その時代にイスラエルが最も版図を広げ繁栄した時代です。ソロモンは、初めてエルサレムに壮麗なヤーウェの神殿を作って繁栄を誇示しました。

この箇所の「ソロモン」はおそらく神殿を象徴し、イエスの時代にはエルサレム神殿はすでに壮麗なものへと再建されていましたが、なお建設中でした。そのためには膨大な税金と労働力が必要でしたが、それを提供したのは貧しい農村の民衆でした。貧しい者からの搾取によって、神殿を「装って」いたのでした。イエスはこれを批判するのです。神のためという名目で膨大な税金を費やして人間が装っている神殿よりも、＜明日は炉に投げ込まれる草＞（これは、人間に労働の苦しみを与える雑草）を装うことに、神は力を注ぐというのです。価値観の全くの逆転です。

イエスは、ありふれた雑草の花の美しさが「ソロモンの栄華」よりはるかに勝っているとまで言い切っているのです。イエスは、アザミの美しさは神が装わせたのであり、そこに「神の支配」を見たのではないのでしょうか。何の価値もないと思われる雑草たちも、神が造られた「極めて良」い（い、は、）の中に入れる？）ものであり、その美しさは「神の支配」を示していると信じたのです。

雑草なんて何の価値もないと思っている私たちに、価値の逆転を告げます。そのイエスの言葉に、はっとさせられるのですね。

「野の花」というのも、当時のユダヤ人の常識では、荒れ野に生える「アザミ」あるいは「イバラ」という意味であったと言います。「野」というのは「荒れ野」です。そこに生えるアザミや茨ですから、農地でも放っておけばアザミやイバラが生えてきて、使い物にならない土地になってしまいます。日本のような気候と違って、イスラエルの地方は半沙漠ですから、それは当然でもあるのです。

創世記三章は、アダムとエバが蛇の誘惑に負けて禁断の木の実を食べ、神から呪いの言葉が発せられていますが、その呪いとして 18 節には＜お前に対して、土は茨とあざみとを生えいさせよ。野の草を食べようとするお前に。＞とあり、呪いのカタログに茨とアザミが入っています。マタイによる福音書 7 章 15 節以下にも、＜偽預言者を警戒しなさい。彼らは羊の皮を身にまとってあなたがたのところに来るが、その内側は貪欲な狼である。あなたがたは、その実で彼らを見分ける。茨からぶどうが、あざみからいちじくが採れるだろうか。すべて良い木は良い実を結び、悪い木は

悪い実を結ぶ。良い実を結ばない木は、切り倒されて火に投げ込まれる。＞とあります。このように、「野の花」は茨やアザミですから、イエスの時代のユダヤ人の常識からすれば、「野の花」は神の怒りのイメージと結びついた草なのであり、神の怒りで焼き滅ぼされるべき存在なのです。

このように、イエスが対象とした「野の花」は、わたしたち日本人が「野の花」から受けるイメージとは全く違っているのです。イエスの言葉からわたしたちが「何と牧歌的な！」と感ずるのは、日本の湿潤な風土の中で培われた日本人の感性がそうさせるのでしょうか。聖書研究がとても大切ですね。そのように理解をすると、聖書の読み方も全く違ってきます。

## ★ カラスを見よ！

次のイエスの言葉に注目してください。＜鳥のことを考えてみなさい。種も蒔かず、刈り入れもせず、納屋も倉も持たない。だが、神は鳥を養ってくださる。＞一般には「空の鳥」という言葉がよく使われますので、一般名詞の「鳥」（トリ）かと思ったら、ルカ福音書では、漢字の横棒が一本欠けた「鳥」（カラス）となっています。ちなみに、マタイ福音書の並行記事では、「鳥」（トリ）となっています。＜空の鳥をよく見なさい。種も撒かず、刈り入れもせず、倉に納めることもしない＞。

新約聖書には四つの福音書がありますが、マルコ福音書が始めに書かれ、後にマルコの記事を参考にしてマタイとルカが編集し直してそれぞれの福音書を書いたと言われます。マタイ福音書をよく読んでみると、マタイは事柄を一般化して表現することが多いのです。たとえば、マルコ福音書の「貧しい人たちは幸いである」という有名な山上の説教の冒頭を、「心の貧しい人々は幸いである」と書き換えています。「心の」を加えることによって、まさに「貧しい人々」貧困にあえいでいる人々に向けた言葉が、精神的に貧しい人々向けに変えられ、抽象化されて、イエスの言葉のインパクトを薄めてしまうのです。マルコ福音書には「野の花、空の鳥」並行記事はありませんが、こういうことから考えると、カラスという固有名詞を「鳥」という一般名詞に書き換えているので、マタイ福音書よりもルカ福音書のほうがより具体的であって、イエスの語った言葉に近いと見做されます。

これを一般名詞の鳥ではなく、鳥「カラス」と言いますと、見えてくることがあります。イエスが生きていた当時のユダヤ社会は、ヤーウェの律法を守ることが最も重要なこととされ、申命記やレビ記に記された律法の条文に忠実に従って生きていました。カラスは、日本でもそうですが、真っ黒でゴミ袋を食い破り、悪賢く他の鳥たちの卵を食べてしまう、気味の悪い不吉な鳥と考えられていますが、イスラエルの地方の人々も、不吉な鳥、汚れた動物と考えていて、食べてはならない動物だったのです。

律法の書レビ記 11 章には、清いものと汚れたものの規定が出てきます。その 13 節には、＜鳥類のうち、次のものは汚らわしいものとして扱え。食べてはならない。それは汚らわしいものである。秃鷲、ひげ鷲、黒はげ鷲、鳶、隼の類、鳥の類、鷲みみずく、小みみずく、虎ふずく、鷹

の類、森のふくろう、魚みみずく、大このはずく、小きんめふくろう、このはずく、みさご、こうのとり、青鷺の類、やつがしら鳥、こうもり。>とあります。

この鳥類リストの大部分は、猛禽類です。猛禽類は、肉食です。そうでないのは、カラス、アオサギ、コウモリ（雑食）くらいです。猛禽類は、蛇、カエル、ネズミ、モグラなどの小動物のほか、小鳥、昆虫類を餌にして生きています。そのような餌になる動物がたくさん生きている環境がなくては、猛禽類も生存できないわけですね。今の言葉で言えば、猛禽類は生態系の頂点に立つ動物です。当時はそのような環境がいたるところに残されていたと考えることができます。現代の日本では、そのほとんどを見ることはありません。猛禽類が生きる環境を人間が奪ってしまったからです。古代イスラエルの時代には、こういう動物がしばしば出没する自然だったのでしょう。

その中に「鳥」が含まれています。ですから、イエスの時代のユダヤ人の常識からすれば、カラスは汚れた動物で、触ったり食べたりすることを禁止されていた動物でした。それは現代人が考えるような衛生上の理由からではありません。宗教的に禁じられているということです。同じように食べることを禁じられている動物に、豚がありますね。ユダヤ教では今なお厳格に守られているおきてです。それはイスラム教も同じです。豚肉は腐りやすいので、最初は豚肉を食べると病気になったりしたことからこの食物禁畏になったという説もあります。ユダヤ人は、とくに宗教的の浄・不浄の観念が強いようです。宗教的な穢れというのは、現代人には分かりにくい概念ですね。

さてイエスは、いきなり「カラスを見よ！」と言います。スズメやツバメではないのです。オオルリなどの美しい小鳥でもないのです。どういうことでしょうか。イエスは次のように言いたかったのではないかと思います。「あなた方が穢れていると勝手に決めた動物カラスでも、種も蒔かず、刈り入れもしないのに、また納屋も倉も持たないのに、神はカラスを養ってくださるではないか。あなた方が忌み嫌うカラスでさえも神の支配のもとにあるのだ、神によって「いのち」を生かしてもらっているのだ。律法が「穢れた」と規定したカラスを、その律法を与えたはずの神が装うのだ」と言うのです。

「神が『極めて良く』造られた動物に貴賤はない。勝手な価値付けをやめよ！そしてあなたがたは、カラスよりもはるかに尊く作られているのだから、「いのち」を生かしてくださる神の支配を信じて歩め！」

なんというすごい言葉でしょうか。

★ 「神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。」

冒頭に記した天地創造の物語を、もう一度読んでみてください。2500年も前の古代人が考えた荒唐無稽な神話だなどといって、馬鹿にはしてはいけません。

そこには、自然に対する新鮮な驚きがあります。昼には太陽が輝き全てのものを照らし、夜は月や星が瞬き季節を知らせてくれる不思議、草木一本一本が、大地の生気を吸い込んで育っていく不



思議、森がたくさん生き物を支え、雨を吸い込んで川の水を保っている不思議、海の水が陸地にまで覆うことがない不思議、動物や人間の精緻に出来た肉体を持つ不思議。それが当たり前と思っている現代人は、その不思議さに感動する心を失ってしまったのです。

世界は、人智では到底計り知ることができない「神の知恵」に満ちている、これらを人間が造ることは絶対に不可能だ！そこから古代人はこの天地自然、万物のすべては、人間をはるかに超えた「最高の理性」を持った「最高の造り主」によって造られたものだ、そうとしか言いようがないという信仰を持つに至りました。＜神がお造りになったすべてのものは、極めて良かった！＞のです。そこには、神に対する信頼があります。いくら古代人とはいえ、河川の反乱、地震の災害、暴風、旱魃など、自然の脅威にさらされて生きていましたから、単純に自然を賛美していたとは思われません。そういう自然災害があることを差し引いても、人間はこの自然を与えられ、その自然の命を食べることによって生かされていることを感謝して、基本的に「神様が造られたものはすべて良い」と考えたのではないのでしょうか。

わたしたちの＜いのち＞も、家族の＜いのち＞も、周りの環境も、決して人間が創り出したものではない。それは、ただひたすら感謝してありがたくいただく、そういうものだ。草木一本も、花や実の一つも大事にして粗末に扱わない。水一杯も、ありがたく感謝していただく、そういう感謝の思いを持っていたのです。こういう思いは、イエスにも受け継がれています。食事の場面ではイエスは、かならず祈りを捧げてから食べます。マルコ福音書の5千人の共食の箇所（マルコ6:41）を例にとりますと、＜イエスは五つのパンと二匹の魚を取り、天を仰いで賛美の祈りを唱え、パンを裂いて、弟子たちに渡して配らせ、二匹の魚も皆に分配された。＞とあり、食事の前に＜天を仰いで賛美の祈りを唱え＞ていました。

昔の日本でもそうでした。食事の前には手を合わせ、食事が終わると「ご馳走様でした」と言いました。それは、植物や動物の＜いのち＞をいただいて、今生かされていることへの感謝を表していたと思います。同時に、農業労働は大変ですので、農家の苦勞を思いながら食事をする。それが家庭教育の基本にありました。それが今失われつつあるのは残念なことです。

現代人は、科学技術が高度に発達し、人間は何でもできると思い込んでいます。何でも作り出すことができる、と思い込んでいます。しかし人間は、科学的に大自然の事実を明らかにすることすら十分にできてはいません。アイザック・ニュートンといえば世界中の人々が知っている大科学者ですが、次のような趣旨の言葉を残しています。「わたしは、小さな子どもが広い砂浜で美しい貝殻を拾って喜んでいるようなものだ、自然界にはまだ明らかにされていないことが大部分であって、自分が発見した法則はそこごく一部分（きれいな貝殻）に過ぎない。」と。わたしはこの言葉が好きです。わたしも科学者の端くれですが、このニュートンの心境がよく分かります。科学は、どこまで行っても自然そのものを知り尽くすことはできない、科学的探求にはきりがありません。

科学は、神が想像された大自然の表面のごく一部分を理解し知っただけに過ぎない。いわんや、造り出すなんて、全く出来ていません。人間の命も、それを支える周りの環境も、神様からのいただきものです。われわれの時代の人間は、人間が世界の主人公だと思っているとともに、この感謝を失いつつあるのではないかと思います。

聖書にあるこの「創造信仰」は、聖書のバックボーンとなるような重要な思想です。それが軽視されてきたことが問題なのではないでしょうか。

マルコ福音書4章に、イエスが語られた「成長する種」のたとえを載せています。このたとえに、イエスの自然に対する信頼・感謝の思いが込められているように思います。＜イエスは言われた。「神の国は次のようなものである。人が土に種を蒔いて、夜昼、寝起きしているうちに、種は芽を出して成長するが、どうしてそうなるのか、その人は知らない。土はひとりでに実を結ばせるのであり、まず茎、次に穂、そしてその穂には豊かな実ができる。実が熟すと、早速、鎌を入れる。収穫の時が来たからである＞（マルコ4：26～29）。

古代人であっても、農民は土を耕し、肥料も入れ、草取りの仕事もあって、農業労働が大変であったことに変わりはないと思います。このたとえは、農民が種を蒔いて育てるのは、種の成長する力を手助けするだけだ、＜土はひとりでに実を結ばせる＞、つまり神が成長させてくださるのだ。人間がいくら農作業をやっても、自然の働きそのものを造り出すことはできない。現代人はわれわれの食物を、人間が生産したもの、「生産物」と言います。そうではなく、種そのものに成長する力を与えているのは神であるから、作物は神の恵みなのだ、というべきです。ただ感謝していただくのです。

「神の国」とは、畑で働いたことのあるひとなら誰でも知っている「自然の恵み」を「与えられる喜び」なのだ、と、イエスは言います。人が努力した、働いたからといってどれほどのことか、自然の恵みの方がはるかに大きい。「神の国」は種を蒔いて放っておけば自然に大地が実らせてくれるようなもの、その自然の力に任せておけば良いのだ！ 神の恵みを感謝せよ！ イエスは、徹底的に自然に信頼し、それを支配する神に信頼し、感謝しているのです。

## II 環境破壊とキリスト教の責任

### ★ 人間中心の自然観からの解放

人間は、宗教や道徳や秩序や文化の名の元に、あらゆる被造物を価値付けています。神が創造された生にも、より価値があるものとそうでないものという区別をつけ、差別しています。「益虫」とか「害虫」とかの区別が良い例です。自分たちにとって損になるもの、都合の悪いもの、恐ろしいものに対しては負の意味づけを与えます。神の呪いであるとか、神の罰であるとか、汚れとか……。

そのような人間の価値観を、イエスはひっくり返します。イエスの視線は、あえて人間の目に価値のないもの、呪われている、汚れているとされている小さな生命に注がれ、その生命の営み中にも神の支配がある、神の祝福があると宣言しているのです。それは、当時のユダヤ人たちの価値観に対する、厳しい問いかけであったと思われます。

今日のわたしたちの世界は、かつてないほどの自然破壊が進み、人類存亡の危機すら迎えている時代です。森は切り開かれ、耕せるところはみな畑になりました。現在の地球の姿は、破壊の極限にまで開発され尽くされ、そこにあった小さな植物、動物は既に絶滅してしまいましたし、ある種

は今も絶滅の危機に瀕しています。それは、人間が神の被造物である自然を価値付け、区別し、差別し続けた結果です。このような時代にあって、わたしたちは、イエスの小さな被造物に対するまなざし、自然に対するイエスのまなざしを想起し、人間の勝手な自然の価値付けを拒否し、自然と共生する道を求めなければなりません。イエスの自然へのまなざしは、今日のエコロジーの神学思想を含んでいると言えるのではないのでしょうか。

そういえば、現代の日本でもありますね。農作物に被害を与える昆虫を、害虫などと呼んで排除の対象にします。そのような思想の元に、殺虫剤が害虫を駆除するために考え出されました。しかし、殺虫剤でその虫だけを殺すことができればいいのですが、同時に他の生き物も一緒に殺してしまう結果になっています。かつては無制限に殺虫剤が開発されて大量に使用されたために、日本の自然（とくに田んぼの生態系）は壊滅状態に陥りました。田んぼから、カエルやドジョウが姿を消し、メダカもいなくなりました。メダカが絶滅危惧種に指定されているなんて、信じられないくらいですね。そういった動物がいなくなった結果、それらを食べる蛇も少なくなり、サギの仲間や猛禽類も少なくなりました（過去の反省から少しずつではありますが、無農薬・低農薬などの施策が進み、だいぶ改善されてきつつありますが）。

同じような事例は、枚挙に暇がないほどです。開発と称して、いとも簡単に森林を大規模に伐採してきました。そこには生き物が充満していますから、まさに生き物の大虐殺（ジェノサイト）です。今年も、熊の出没と被害が大きな問題となっています。熊が生息している森のコナラ・ミズナラとかのどんぐりが少なくなったために、この時期に冬眠の準備にかかる熊が食糧難となり、里に熊を出没させる原因となっていると聞きます。報道によると、「害獣」だとして射殺してしまうことが多いですね。それで良いのでしょうか。熊との付き合い方を工夫すれば、人と熊の共存は可能だ、と専門家は言います。

問題は、このような人間中心の価値観です。人間の生活に支障となるものはどんどん排除していく。人間には、神が「極めて良く」造られた被造物（自然、生きもの）のことが目に入っていないのです。

自然は、たくさんの種類の生き物が相互に関係しあいながら生きている生物多様性の世界です。それが生態系です。海の生態系、熱帯雨林の生態系、砂漠の生態系など、その生態系は大きな地理的環境区分によって分けられていますが、それぞれの生態系の中での生き物は食物連鎖によってひとつのシステムを作っています。植物が昆虫によって食べられ、昆虫は鳥などの小動物に食べられ、鳥や小動物はオオカミや猛禽類に食べられ、枯れた植物や死んだ動物たちは土壌中の生物によって分解され、植物の栄養塩類となって植物を再生させる働きをします。このような食物連鎖による循環が生態系です。人間は、他の生き物の命を食べて生きています。人間もその生態系の一員であることは論を待ちません。

現在、人間が生態系の頂点に立つ存在です。人間は、その生態系を分断し、選別し、利用しつくすのです。人間が自然の征服者のような振る舞いをしてきました。このことを思い起こし、もう一度、人間も生態系の一員であることの意味を問い直す必要があるのではないのでしょうか。今、名古屋で「生物多様性条約締約国会議、COP10」が開かれています。まさに生物多様性を阻害し

てきた現代文明のあり方を根本から変えていく、その国際的なルール作りの会議です。大きな成果を期待しているところです。

生物多様性条約の理念は、人間中心の自然支配の思想から自由になり、すべての生物は相互に関係していることを重視し、人間を含めた生態系全体を守っていくことにあるのです。＜神はお造りになったすべてのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった。＞と創世記に示された被造物世界の素晴らしい関係性を取り戻すことが、全世界の課題となっているのです。イエスの言葉は、現代のような生態学的な知識はなくとも、創世記の思想を前提としたエコロジカルな思想を言い表しているのではないかと思います。

古来のキリスト教会が、注意深くこのイエスの言葉を聴いてきたならば、人間による自然破壊をもっと早い時期から阻止し得たのかもしれませんが。神学の責任です。

### ★ 環境破壊とキリスト教

キリスト教は、ヨーロッパの近代以降、自然を制御できるほどの技術力を持ったとき、人間が自然を支配するという思想をもって、自然破壊を促進してきました。それは歴史的事実です。それは特に 20 世紀に入り「三つの C」が開発されてから、加速度的に自然破壊が進みました。「三つの C」というのは、カー (Car、自動車)、キャタピラー (Caterpillar、重機)、チェンソー (Chainsaw) です。大型重機の出現によって大規模の掘削が可能になり、自動車という運搬手段によって効率的に土砂や物資を輸送できるようになりました。チェンソーによって、森林を効率よく伐採することができるようになりました。

その時に人々は、創世記の天地創造の物語から開発の正当性を根拠付けたのです。＜神は言われた。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」神は御自分にかたどって人を創造された。神にかたどって創造された。男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。「産めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地の上を這う生き物をすべて支配せよ。」神は言われた。「見よ、全地に生える、種を持つ草と種を持つ実をつける木を、すべてあなたたちに与えよう。それがあなたたちの食べ物となる。地の獣、空の鳥、地を這うものなど、すべて命あるものにはあらゆる青草を食べさせよう。」そのようになった。＞

この神話から人は、「人間は、神に似せて造られた万物の霊長であり、自然を支配する権利を神から認められた存在なのだ。だから他の生物を殺しても許されるのだ」と考えました。そして、人間の欲望による破壊であっても、自然を破壊することを正当化したのです。特に、＜生めよ、増えよ、地に満ちて地を従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這う生き物をすべて支配せよ。＞の言葉を根拠にします。そこが間違いの原因だったように思います。共同訳では「支配せよ」となっていますが、口語訳では「治めよ」と訳されています。ヘブル語で「ラーダー」という言葉は、治める、コントロールするというような意味内容です。つまり、人間が動物を支配する・治めるというのは、人間の意のままに動物たちの生殺与奪の権を持つというのではなく、神の意思に従って動物たちがよい状態に保たれるようにコントロールするという意味です。

前後関係を見ると、動物を支配するということにはいくつかの歯止めがかけられています。まずこの支配は、神の代理として、神の祝福を受け、神の意思を代行するものであり、人間の勝手気ままというのは許されていません。少なくとも海の魚と空の鳥については、神が祝福し、生めよ、増えよ、満ちよと言われ、神が良いと言われたものなのですから、そのためには水と空気も汚染されてはならないのです。

この物語では、人の食物は、種を持つ草と果樹です。動物は人間の食物ではありません。それを殺して食べることは考えられていません。ただし、この点はノアの洪水の後に変わりますが、…。さらに人間が治めるべき動物にも食物として神は青草を与えていますので、そのためには植物が生える土が大切にされなければならないこととなります。青草を採り尽くしてしまつては、他の動物は生きていけません。地の青草の採取は慎まなければなりません。

このように、人間の動物支配には、いくつもの歯止めがかけられており、むしろ自然保護を命じているとさえ言えるのではないかと思います。人間は、生態系の中で、植物、動物と共存して生きるべきことが語られているのではないのでしょうか。ここを間違つて読んでしまうと、とんでもない自然破壊を神が認めたことになってしまいます。

### ★ 「ノアの洪水物語」のもう一つのメッセージ

さて、このことをもっとはっきりと言っているのが「ノアの洪水」物語です。ノアの洪水の話に移りましょう（創世記第6章～9章）。この地は神の前に墮落し不法に満ちているのを見た神は、人間を含むすべての被造物を滅ぼすことを決意し、ノアに命じて箱舟を作らせます。＜そして地上に洪水をもたらし、すべての命の霊を持つものを天の下から滅ぼし、地上のすべてのものは息絶える。わたしはあなたと契約を立てる。あなたの妻子や嫁たちとともに箱舟に入りなさい＞と命じます。そして、動物・植物のあらゆる種類をひとつがいつ箱舟に入れさせます。四十日四十夜の雨の大洪水ですべて生き物が滅ぼされた後、箱舟に入った命は再び地上に生きることが許されました。有名な物語ですね。

この物語の主題は、「大洪水は、人間が墮落したために自ら招いた裁きであり、墮落した人間を滅ぼす神の意志」ということです。それほど人間の墮落は計り知れないものだったのです。しかし、それだけではありませんでした。その時の神の命令に注目してください。＜すべて命あるもの、すべて肉なるものから、二つずつ箱舟に連れて入り、あなたと共に生き延びるようにしなさい。それらは、雄と雌でなければならない。それぞれの鳥、それぞれの家畜、それぞれの地を這うものが、二つずつあなたのところへ来て、生き延びるようにしなさい。更に、食べられる物はすべてあなたのごところに集め、あなたと彼らの食糧としなさい。＞と命じていることです。

この命令の意味するところは、地上のすべての生き物たちを箱舟に入れることによって、全ての生き物を救うという神の意志が示されたということです。人間だけを救済の対象にされたのではなかったのです。神はノアに命じられました、＜あなたはすべてくいのち＞あるものを……。あなたとともに生き延びるようにしなさい。＞と。つまり、人間だけが生き延びたつて、この世界は成り立たない。あなたと共に、すべての生き物たちのくいのち＞を生き延びさせる責任が人間にはあるのだ。動物や植物のすべての命が保たれ、自然全体の環境が守られなければ、人間のくいのち＞

も危ないのだ。人間は、他の生き物の<いのち>を食べて生きているという事実謙虚になって(生態系の一員であることを自覚して)、他の生き物と共存して生きよ！　これがノアの洪水物語の、もう一つの重要なメッセージではないでしょうか。

昔からキリスト教会がこのような聖書の読み方をしているならば、「環境破壊の思想的な先導役を果たしてきたキリスト教」などと非難されることはなかったでしょう。

### Ⅲ 「思い煩い」からの解放

#### ★「思い煩い」から解き放たれる

さて、再びイエスの言葉に戻りましょう。ところで、私たちの現実、忙しく毎日の煩雑な仕事に追われ、職場の人間関係や仕事の進捗にいらいらしながら、漠然と将来への不安を感じながら、目の前のことにしか目が向けられないでいます。健康な人でもそうですから、ましてや病気で苦しんでいる人、経済的に不安を感じている人、家族の重荷を抱えている人などは、とてつもない大きな不安と戦いながら生きています。私たちは、絶えず「思い煩って」生きています。

この聖書の言葉が驚きと感動をもたらすのは、そのような現実のわたしたちに、イエスは「野の花・空の鳥を見よ！」と語りかけ、わたしたちの目の向けどころを転換させられることです。思い煩っているわたしたちの現実から、目を野の花や空の鳥に向けさせ、ソロモンの栄華に勝って美しく装ってくださった神の創造の業の素晴らしさに気づかせてくれます。目の前の日常生活の忙しさ、わずらわしさに捕われがちな私たちの視点を花や鳥に向けることによって、もう一度、私たちが神の支配の下にあることを気づかせてくれるのです。

しかし、考えてみると、イエスの話はあまりに楽天的ではないか、という思いをも禁じ得ません。イエスの話を聞いていた人々の現実、貧しくて借金せざるを得ないで貧困にあえいでいた人々、病気で苦しむだけでなくそのことのゆえに社会から隔離されて生きなければならない人々、家父長制社会の中で夫や家族の言いなりに重荷を負わされて生きなければならない女たちでした。生きることにそのものが、そんなに生易しいことではない現実の人々です。イエスは、そのような現実を百も承知でこの言葉を発した、とわたしは思います。

そこに居合わせた群衆は、イエスの言葉によって「そうだ、俺たちは貧しくてこき使われて食べることも着ることに事欠き、生きるのがやっとだけど、イエスがいうように雑草やカラスだって神の支配の下にあって生きていけるのだから、俺たちにも神が生きる道を開いてくれるに違いない。それを信じて生きる勇気を、イエスが与えてくれた。」という思いにさせられたと思います。

現代の問題でいえば、「いつ終わるか分からない年老いた父母の介護に疲れ果てて、生きる勇気がなくなり、鬱(うつ)になってしまいそうだけど、野の草やカラスでさえ神が養ってくださるのだ、そのようにいつかは神が私を介護から解放してくださるときが来る。忍耐してそれを待とうと思う。」と思ひ直す人々がいると思います。

さらに、「俺たちは、不況で就職口が見つからず、アルバイトや派遣労働者として働く以外に道はなく、今は健康だから何とかやっつけていけるけど、結婚したくても出来ず、将来に大きな不安を感じているけれど、イエスが、踏みつけられる道端の雑草もソロモンの栄華よりも装っている、忌み嫌われるカラスだってちゃんと生きているのではないか、と言われると、神が俺たちを見守ってくださっていると思うことができる。」

そうだ！ わたしは、神によってあの美しく可憐な野の花、美しい声で鳴く空の鳥よりもはるかに価値ある存在として作られている、神はわたしを神の似姿として創造され、大きな神の愛の御手の中に自由にのびのびと生きることを許されている存在なのだ！これがイエスの福音です。

この言葉によって、わたし自身は信仰を開眼しました。高校から大学に入った頃でしたが、わたしは、より真実なもの、より高貴なもの、より意味深いもの、より美しいものを求めてあがいていました。そのため、古今の優れた文学書や哲学書を読みあさりしました。そこから大きな影響を受けました。わたしは音楽が好きで、ヴァイオリンなどの楽器をひきはじめ、真面目に音学家になりたいと懸命に練習しました。才能がないことを悟って音楽の道を諦めましたが、その中で感じたことは、音楽は人の心を和ませたり勇気を与えたりはするけれど、決して人を救わないということでした。

当時のわたしは、世の中のひとはすべてお金のために生きている、自分のエゴイズムを満たすためだ、何もかも欺瞞に満ちている、真実などどこにもない、そう世の中を批判しながら、自分自身は有名大学に入りたい、出世してお金持ちになりたいなどというエゴイズムから離れることができず、他人との競争に負けたくないと思死に受験勉強していたのです。失恋もありました。何もかも空しい、生きることに意味を見いだせないのは苦しいことです。

そんな時に、聖書のイエスに出会って、イエスのように、苦しんでいる人々の苦しみを担ってともに生きた生き様に真理がある、それと比べて自分は何と惨めな存在なのだろうと、エゴしか求めている自分自身の醜さに耐えられないでいました。そこでこの言葉（その他いくつもありますが）が飛び込んできました。そうだ！こんな惨めな人間でも、野の花・空の鳥よりもはるかに価値のある存在として、神が認めているのだ。

そう思った途端、不思議なことに、わたしの心に喜びが満ち溢れて涙が止まらないのです。ようやく確かなものを見つけた！という嬉し涙だったのです。何日も興奮して眠れませんでした。こんなことって、あるのですね。これが私の信仰の開眼であり、これが聖霊体験というのだろうと思っています。

## ★ 生命保険は必要ない？

<だから、言っておく。命のことで何を食べようか、体のことで何を着ようかと思悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大切だ。>

イエスは、この箇所の冒頭に、食べ物、着るものよりも命そのもの、体そのものが大切であると語ります。つまり、生きていることそのものが大切だと言いたいのです。食べるものがなければ生きていけません、着るものがなければ生きていくことは困難です。「しかし、命そのものは神から

与えられたものだ。カラスの命は、種もまかず、刈り入れもしない、納屋や蔵を持たないのに、神はカラスの命を養っているではないか。野の草も働きもせず紡ぎもしないのに、神は栄華を極めたソロモンよりも美しく装おわせているではないか。食べ物は2、3日食べなくても死ぬことはない、着るものが乏しくても何とか生きていける。そのことで思い悩んではいけない。あなた方の父もそれらのものが必要なことはご存知だ。」

イエスが言う信仰とは、このように神を信じて生きていくことです。イエスには、神に対する全幅の信頼があるのですね。そこに驚きを感じます。

それが信じられないので、人々は食べ物、着るものがなくなったらどうしよう、と思いつつ煩うのです。思いつつは生活のすべての領域に及びます。病気にかからないように、病気の早期発見と称して定期検診や人間ドックに毎年病院の検診に行く人がいます。その検診結果の数値に一喜一憂するのです。検診ノイローゼなんていうこともありますね。検診がストレスとなって、他の病気の原因となる場合すらあります。基本的に、現代医療は進んでいても、人の死は神がつかさどっていると信じていれば、病気を恐れることはないと思います。

死んだら家族が困らないように、と多額の生命保険に入る人がいますね。その時には、家族は自分で生きていけると思えないからそうするのでしょうか。自分がいなくなっても家族は生きていけるかもしれません。その可能性を信じるのが出来れば、高い保険料を支払う必要はありません。このことは、生命保険ばかりでなく、傷害保険、火災保険、地震保険などでも同じで、対応していたら切りがありません。現代の人間は、そのためにどれほど多くの財産を費やしていることでしょうか。そのための企業の宣伝はすごいですね。毎日のように巨額を投じてテレビや新聞に広告を出しています。それほど売れるのでしょうか。それは、人々が病気や障害などへの恐怖感を植えつけられた結果とも言えるのではないのでしょうか。

生命保険、傷害保険、火災保険などの保険制度は、イエスによれば、神を信じない人々の思いつきを商売にしたものであり、許されないと考えるでしょう。イエスの時代と現代とはまったく異なった社会システムですので、一概にそれらを全面的に否定することは出来ませんが、基本的には保険制度はなくなったほうがよいと思います。欲に駆られた人間によって「保険金殺人」なんていうことが引き起こされる、その異常さに気がつかないといけないのではないのでしょうか。

イエスの時代も日本の昔も、地域共同体・肉親共同体のつながりがしっかりしていましたが、現代のように、「隣の人の顔を見たことがない」というような隣人との希薄な関係性があり、「個人は個人で生活を守る」ことが当たり前になった社会では、自分で自分を守る保険制度がなければ不安を解消できないとも思えるのです。

## IV イエスが発見した「神」と「神の支配」

### ★ イエス時代のユダヤ教

イエスの生き様をよりよく理解するためには、さらにこの「野の花、空のカラスを見よ」の言葉を十分に理解するためには、まずは、当時のユダヤ教の状況を知らなければなりません。



イエスの生きた時代は、ユダヤ人たちは終末論的な神の支配が待望されていました。前4世紀にアレクサンダー大王による東征が行われて、中近東地域にヘレニズム時代が訪れました。ユダヤは4分割された後継の王朝に支配されました。特にユダヤ地方では、ヘレニズム文化に心酔した王（たとえばアンティオコス・エピファーンネス）などによって、ユダヤ教は弾圧されました。しかしそれに反抗してマカベア戦争を起こすなど激しい闘争を経て、ユダヤはかろうじて独立を保ってきました（ハスモン王朝）。

ヘレニズム時代の苦難の中から、ユダヤでは終末的メシア待望が起こってきます。それは、その後のローマ帝国の支配の下で、ますます過酷にユダヤの人々は搾取され、生きていくのがぎりぎりの生活を余儀なくされていました。人々にとっては、「終わりのときに神はメシヤ（救世主）を起こし、我が民族の苦境を救ってくださる」と信じることで、かろうじて精神的安定を保っていたのです。ルカは、洗礼者ヨハネについても「民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。」（ルカ3:15）と記しています。イエスの時代でも、民衆レベルでメシア待望が強かったことが分かります。

そのために、「今は終わりのときだ、われこそはそのメシアだ」と称して、民衆を扇動して暴動を起こしたりする事件もたくさん起こっています。メシアに救いを求めるのは、考えてみれば「現在の神が無能なのでわれわれは救われない」というのと同じで、現在の神に対する不信を言い表しているのです。その待望は、現在の神に対する不信の裏返しであり、また現実社会における歪みの真の原因は別のところにあるのに、それを隠蔽することになります。

当時支配していたもう一つの思想は、モーセに示された律法を守ることによって神の前に功績を積み上げ、神殿建築する、神殿礼拝をすることによって神の前に功績を積むことが重んじられていたことでした。歴史的に見ると、このような考え方でいち早く民衆の中に入って民衆を指導したのは、ファリサイ派の人々です。律法が書かれている申命記やレビ記は古い時代に書かれたもので、時代に合わなくなってきました。するとそれを解釈する教師（ラビ）が現れ、いつそう細かい律法の条項が増えていくことになりました。その結果、安息日規定、食物規定、浄不浄の規定など事細かに規定されて、人々の生活を縛るものとなっていきました。律法が厳格化・細分化されていくにつれて、律法を守ることが出来る人は限られ、大半の民衆は生活苦のゆえに律法を守ることが出来ず、「罪人」とされていきました。律法を守る人は「義人」として人々から尊敬を集め、義人による罪人の差別があからさまになっていきました。

ローマ支配下にあった後一世紀のパレスチナでは、終末待望と結合した民族意識が高揚していました。それは、対内的には「ユダヤ人らしさ」の要求と結びつき、律法遵守の度合いを基準としてユダヤ人内部に次第に「義人」「罪人」に二分する二元論的人間観が、民衆レベルにまで蔓延した時代でした。それは社会の差別の連鎖を引き起こし、社会の底辺に置かれている者たち（穢れたと見なされた職の者、病者など）は、「罪人」のレッテルを張られ、宗教的にも社会的にも共同体から疎外されていました。

## ★ 洗礼者ヨハネの説教

そうした時代の空気の中で、イエスは「罪人」と恒常的に交わり、彼らを共同体に復帰させるべく活動しました。奇跡物語の多くがそのことを語っています。それは同時に、「義人」を徹底的に批判し、自分を義人と思いこんでいる一般民衆に対する問いかけと批判とを持ちました。イエスは、業績（律法遵守の度合い）が人間存在の評価基準にはならず、いかなる者も神によって等しく生かされて在ることを訴えるのです。

イエスはおそらく、自らの「罪」について強い自覚を持っていたためでしょう、一家の大黒柱であるにも関わらず家族を捨て、洗礼者ヨハネのもとに馳せ参じたのでした。そして、ヨハネから洗礼を受け、ヨハネの弟子となったのです。その部分の聖書の記事を示しておきましょう。

#### ◆洗礼者ヨハネ、教えを宣べる

そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。これは預言者イザヤによってこう言われている人である。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、／その道筋をまっすぐにせよ。』」ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

#### ◆イエス、洗礼を受ける

そのとき、イエスが、ガリラヤからヨルダン川のヨハネのところへ来られた。彼から洗礼を受けるためである。

(新共同訳 マタイ福音書 3：1～13)

荒野に住み、「らくだの毛衣を着、腰に皮の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた」というのですから、ヨハネは日本の修験道の行者のようですね。彼はファリサイ派やサドカイ派の偽善を見抜き、<蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる>と。激しい言葉で迫る迫力のある説教であることが分かります。終末の裁きが切迫していること、その裁きからはユダヤ人であっても逃れられないこと、それゆえに悔い改めが必要であることを説教しました。

ユダヤ人は、自分たちには父祖アブラハムがいることを誇り、われらはアブラハムの子孫であるから神に裁かれることはないと思っていました。ヨハネは<神はこれらの石ころからでもアブラハ

ムを起こすことができる>とあって、ユダヤ人が神の裁きを免れる保障は一切ないというのです。必要なことは、「悔い改めに相応しい実を結ぶ」ことだ、と説教しました。そして、悔い改めの証として洗礼を授けたのです。

ユダヤ人は外側の「穢れ」を清めるために「禊ぎ」を日常的に行っていました。ヨハネはこの穢れを水で清めるという象徴的な意味を持たせるために洗礼を行ったのです。ユダヤ人の町や村には、ミクウェーという禊ぎ用の水槽があって、人々は何らかの穢れがついたときにその水で穢れを清めていました。穢れは人に伝染すると考えられていたので、身を清めるまでは人との接触が禁じられていました。たとえば、月経中の女性はその血の穢れのゆえに、その期間中は隔離されました。このように禊ぎは日常的に行われていたのですが、ヨハネはこれを一回限りの洗礼とすることで決定的な悔い改め、「もろもろの罪の悔い改め」の象徴としたわけです。

人々は、穢れあるいは罪を犯したとき、神殿に行き何がしかのお金を支払って犠牲の動物を買って祭司に与え、祭司が動物を殺したその血で罪や穢れが購われる儀式を行ってきたので、人々は煩雑な神殿祭儀にお金を払う必要なくなるのです。そういう意味で、ここには形骸化した神殿祭儀に批判的なヨハネの姿勢が表されているのではないかと思います。

一回限りでよい洗礼、「もろもろの罪の悔い改めの洗礼」を受けることによって、すべての罪から救われる。「斧はすでに木の根元に置かれている。終末の時は切迫している。その時、「悔い改めに相応しい実」を結ばない木はみな、切り倒され、火に投げ込まれる。お前たちはどの道を選ぶのか」と激しく悔い改めを迫ったのです。「天の国は近づいている」という切迫感を持つ説教に、多くの民衆が新しい教えを聞き、続々とヨルダン川に集まって彼から洗礼を受けました。

洗礼者ヨハネの生き方を知ったイエスは、ヨハネの説教に感動し、その説教内容を信じたのですから、イエスはおそらく、自らの「罪」について強い自覚を持っていたと思われます。そしてヨハネから洗礼を受け、ヨハネの弟子となったのです。後のキリスト教は、イエスの無謬性を主張するのですが、イエスが自ら洗礼の際にもろもろの罪を告白して赦しを願ったのですから、イエスには赦してもらえない罪の自覚があったと考えざるを得ません。

とことで、本田哲郎というカトリックの司祭がおられます。カトリックの優れた聖書学者で、釜が崎の労働者の町に住んで宣教しておられる人です。彼は『小さくされた人々のための福音—四福音書と使徒言行録』という新しい福音書の翻訳書を出されました。本田さんは、ここに出てくる「洗礼」という言葉が「洗う」という言葉の語感から、洗礼を受けることが「穢れを洗い清める」ことであるかのように誤解され、洗礼を受けた人は「清い人」、洗礼を受けていない人は「穢れた人」というような錯覚を多くのキリスト者に抱かせてきたのではないかと、と言います。

洗礼（バプテスマ）の本来に意味は、低みから低みへと流れる川の水面下に全身を沈めて「低みから見直させる」民間儀式であり、穢れを洗い流す浄・不浄の問題とは関係がないとし、本田さんは洗礼という言葉を使わずに、最も低いところ、すなわち社会の底辺に身を沈めるとの意味をこめて行う儀式、「沈めの式」と訳しました。大変重要な指摘です。

さて、ヨハネの説教は、民衆にも分かりやすく具体的です。ルカ福音書3章には、<そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、<下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ>と答えました。

徴税人も洗礼を受けるために来て、<先生、わたしたちはどうすればよいのですか>と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。>（ルカ 3：10～14）と記されています。ですから、ヨハネはとても人気がありました。

この人たち（群衆）は、当時のいわゆる「罪人」です。ヨハネがその人たちと交わりを持っていたということは重要です。ヨハネの教えの内容は、下着を分かち合う、食べ物を分かち合うなど、人と人とが助け合う、苦しみや悲しみを分かち合うことです。つまり、低みに立つ人々と連帯して（助けあって）生きよ、ということです。イエスが苦しんでいる人々との分かち合い、連帯を求めたことと同じです。ですから、ヨハネはとても民衆に人気がありました。権力批判をするヨハネが目障りになって殺そうとしたヘロデ王も、民衆の人気のゆえになかなか殺すことができなかったほどでした（マルコ 6：1～29）。

## ★ 悔い改めとは？

それにもかかわらず、イエスがヨハネから決別していったのはなぜでしょうか。それは、「悔い改め」の理解をめぐって、さらにさかのぼってヨハネとの神観の違いを見たからです。具体的に聖書の記事から学びましょう。下の記事は、ルカの考えとイエスの考えの違いを明らかにしています。

### ◆悔い改めなければ滅びる

ちょうどそのとき、何人かの人に来て、ピラトがガリラヤ人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。イエスはお答えになった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。決してそうではない。言うておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」

### ◆「実のならないいちじくの木」のたとえ

そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。そこで、園丁に言った。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけたためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』園丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って、肥やしをやってみます。そうすれば、来年は実がなるかもしれません。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』

（ルカ福音書 13：1～9）

このたとえ話は、具体的な悲惨な出来事の被害の原因が本人の罪にあったのかどうかを問われたイエスが、ぶどう園の園丁のたとえで答えるという内容です。ルカは、「決してそうではない」と

否定したあとに、「あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」と2回繰り返しています。聖書学者によれば、皆同じように滅びると2回繰り返している言葉は、元の伝承にルカが付け加えた編集句だ、元の伝承は「決してそうではない」で終わっていた、と言います。つまり、災難に遭ったのは本人が罪深いためでは「決してない」のであって、災難と本人の罪とは関係がないのだ。しかし、「悔い改め」を強調するルカの解釈によると、彼らは罪を犯した結果災難に遭ったのであり、罪を悔い改めなければあなた方も皆同じように滅びると解釈したのです。元の伝承と正反対の解釈です。ルカによれば、園丁のたとえ話は、罪を悔い改めなければ滅びるという因果応報を肯定して、その具体例を示す話になってしまいます。

その問答の後、園丁のたとえが語られますが、ぶどう園の主人は、イチジクの木が3年も実を付けないのだから、つまり「悔い改めの実」を付けないのだから切り倒せ！つまり容赦なく伐り倒して殺してしまえと命じました。これは、これまでの伝統的なユダヤ教の神です。悔い改めないで律法を守らない「罪人」は、神の国に入ることは出来ない。地獄に落ちるのだ。これは、因果応報の神です。

それに対して、園丁はくなく実を付けないイチジクですが、今年もこのままにしておいてください。木の周りを掘って肥やしをやりますと、実を生らせないイチジクを必死にかばい心を注ぎ、至り尽くせりの努力をします。このたとえ話の主題は、イチジクが実を実らせたかどうかではない、つまり悔い改めたかどうかではない。何年待っても実を実らせないイチジクのために必死に心を注ぎ、イチジクを守り、このイチジクをそのまま受け入れようとしている園丁の言葉と振る舞い、それこそが主題なのです。

つまりこれが、イエスが覚醒し、発見し、出会った神なのです。イエスの神は、悔い改めなければ滅びる、などという捉え方で向き合うお方ではない。イエスは、伝統的な知恵による神理解を突破しています。

イエスは、このような神の徹底的な無条件の愛と赦しの中に、あなたはすでに捕らえられ生かされているのだ、神のこの愛に気づいて方向転換せよと言っているのです。「悔い改め」の本来の意味は、単なる後悔ではなく、「方向転換」「立ち返り」を意味します。生き方の方向転換であり、神観の方向転換です。「神の国は近づいた、悔い改めて福音を信ぜよ」という言葉で宣教を開始しましたが、その「悔い改め」とは、上に述べた徹底的に人間や被造物を愛する神信仰への方向転換です。

## ★ 「放蕩息子のたとえ」が語る神

ルカ福音書に、「放蕩息子のたとえ」があります。少し長いですが、その箇所を聖書から引用しましょう。これほど、イエスが信じた神の姿を的確に言い表したたとえはないと思います。

### ◆ 「放蕩息子」のたとえ

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、

遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使いしてしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起こって、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話をさせた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物を与える人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」と。』

そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。

ところで、兄の方は畑にいたが、家の近くに来ると、音楽や踊りのざわめきが聞こえてきた。そこで、僕の一人を呼んで、これはいったい何事かと尋ねた。僕は言った。『弟さんが帰って来られました。無事な姿で迎えたというので、お父上が肥えた子牛を屠られたのです。』兄は怒って家に入ろうとはせず、父親が出て来てなだめた。しかし、兄は父親に言った。『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのあの息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』すると、父親は言った。『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。だが、お前のあの弟は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか。』(ルカ福音書 15 : 11~32)

このたとえ話は、父は二人の息子に財産を分与したが、下の息子は放蕩三昧をして譲り受けた財産を使い尽くして、飢饉などがあって食うに困って父の家に戻ってくるという筋立てです。<お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください。>と言って父のもとに戻ってきました。それに対し父親は、息子を見つけて憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻して>下僕たちに言います。<『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。』

それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして祝宴を始めた>のです。

これが、イエスの信じる神です。人間は誰でも欲望に惹かれて放蕩三昧をするなど、人生を失敗する、あるいは罪を犯すことがある。しかし、神は、どんな人間をも無条件に愛し受け入れて、生きていることそのものを心から喜んでくださるのだ。父は、<死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったから>と喜びに溢れ、祝宴まで開くほど、人間がその<いのち>を生きていることを喜ぶのです。父は、息子の「悔い改め」あるいは「悔い改めの質」を問題にしていません。親は、どんなぐうたら息子・娘でも、最終的には見捨てずに彼らを最後まで面倒を見るものです。それが子に対する親の愛・責任感というものです。親にとっては、どんなぐうたら息子でも娘でも、生きていることだけで良いのではないのでしょうか。

### ★ もう一人の放蕩息子

それに対して、不満たらたらで怒ったのが兄です。兄は父親に言った。<『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。それなのに、わたしが友達と宴会をするために、子山羊一匹すらくれなかったではありませんか。ところが、あなたのお息子が、娼婦どもと一緒にあなたの身上を食いつぶして帰って来ると、肥えた子牛を屠っておやりになる。』>と怒りをあらわにします。兄にしてみれば、父親の取った行動は著しく不公平に見えたのです。父親の言いつけを忠実に守ってきたのに、何の贅沢も許してくれなかったのに、放蕩三昧をしてきた弟には子牛をほふって祝う、その父親の行動が許せなかったのです。

しかし、考えてみてください。兄の言い分には、弟と比較して自分は損をしているとする考えが根底にあります。弟と比較しなければ、つまり弟が帰ってこなければ、自分が損をしているとは思わなかったはずです。自分は父親の言いつけ（神の律法）を忠実に守ってきた、律法を守らない「罪人」とは違うので、だから弟よりも自分こそ父の（神の）祝福を受けるのが当然だ、という思い上がりがあります。業績主義あるいは能力主義とも言えるでしょう。しかしそれは、社会の競争原理であり、業績の多少はその人の能力の一部を評価することはできても、人間存在そのものを価値判断する基準にはなりません。他者と比較して自分の方が優れている「義人」なのだ、弟のような人間はまさに「罪人」ではないか、そんな人間は神の罰を受けなければならない、と兄は考えるのです。冷酷ですね。これが、因果応報の神であり、旧約聖書の神です。イエスの信じた神ではありません。

兄の生き方は、一見正義です。外見上は、正しいことをしているのです。羽目を外すことなく、自分を厳しく律して罪を犯さず、品行方正で立派です。でもそれは、正義でない人「罪人」を裁くことによって自分の義を立てようとするのであって、正義が人を裁くという罪を犯しているのです。

もし兄が、どこで生きているかわからなくなってしまった弟の身を案じる心があったなら、父と一緒に心から弟の帰還を喜んだことでしょう。兄は父親の庇護の元で、何不自由なく生きてきたのです。父は<『子よ、お前はいつもわたしと一緒にいる。わたしのものは全部お前のものだ。』>と言っているのに、父親の庇護のもとに生きる、その恵み、幸いを忘れてしまっているのです。あるいは父親の庇護のもとに居ることが苦痛になって、父親の監視のもとに置かれていると考えたのか

もしれません。＜『このとおり、わたしは何年もお父さんに仕えています。言いつけに背いたことは一度もありません。＞という言葉に、その気配を感じます。父に仕えることが苦痛で、言いつけに背きたいと思っている心情が表れています。父の下で生きることが苦痛だったのです。それは兄が、神を、罪には罰をもって報いる因果応報の神と思い込んでいたからです。罪の結果は罰によって報われるという思想は、人を窮屈な思いにさせます。なぜなら、いつも神に監視されているようなものですから。

弟の帰還を率直に喜ぶことができない兄の屈折した思いにも、わたしたちは共感するような思いになることがあります。そのような思いになったら、危険信号だと思わなければいけません。それは、絶えず他者と比較して自分は、と思う思考回路です。自分は一生懸命働いているのにあの人はサボってばかりいる、自分の方が能力があるのに、彼は早く昇進していく、それなのに自分は未だにペイペイの平社員だ。他者と比較して自分が損をしていると思うと、心に不平不満が起こってきます。他者の悪い点ばかりが目につけてきます。自分はあの人間よりはましだなどと思うと、他者を軽蔑するようになります。逆に、自分よりも有能な人がいると、うらやましいと嫉妬の感情を持ちます。それが高じると、憎しみに変わります。弱気な人では、どうせ自分なんかだめなんだ、というひがみ根性が芽生えて、自分を卑屈にしてしまうのです。

この優越感と劣等感が恐ろしいのです。なぜ素直に、その人より能力がない人間であっても、他人（ひと）は他人（ひと）、自分は自分！ 自分は神によって愛され生かされているのだ、と思えないのでしょうか。その人が高く評価されることを羨んで嫉妬するのではなく、その人と同様に神が自分を認めてくださっていると思えないのでしょうか。それは、神と、つまり絶対的なものと繋がっていないからです。神と繋がっている人は、自分の生き方に絶対的な根拠を持ち、他者によって左右されない自分自身の生を生きることができるのだと思います。他者との相対的な優劣だけを振り所に生きている人は、他者によっていつも右往左往していなければなりません。

本当に不幸なのは、弟よりも兄の方だと思います。放蕩はしていませんが、もう一人の放蕩息子は、兄です。

## V イエスの死が意味すること

### ★ 洗礼者ヨハネとの決別

洗礼者ヨハネについては、イエスも一時は感動してヨハネから洗礼を受けるのですが、ある時、ヨハネとの神観の違いに気づかされ、ヨハネとは別の道を歩んだのです。その違いとは、ヨハネの洗礼は、一回限りの洗礼で「もろもろの罪の赦し」を与えてはくれるものの、その後は「義人」として生きることを求めるものでした。ヨハネの言う「悔い改めにふさわしい実」とは、律法を守りよい行いをする、すなわち「義人」になることです。

洗礼者ヨハネから洗礼を受けた徴税人や娼婦たちは、洗礼を受けた後どのように生きたのでしょうか。その職業自体が罪と見なされていたわけですから、好んでその職業を選んだとは考えられま



せん。娼婦は、ほとんどが生計のためですし、借金のかたに身を売っているのです。徴税人も、それ以外に食べる道がなかったから、ユダヤ人が忌み嫌う職業を選んだと思います。洗礼の後、彼らはかつての暮らしをして生きていけたのでしょうか。それが可能なら、始めからそのような職業に就かなかつたはずで、結局、ヨハネの洗礼によって罪を許されることが可能なのは、自分の意思で「罪」から逃れられると思うことができる環境に生きている人でしかないのです。

イエスはヨハネを尊敬していました。〈およそ女から生まれた者のうち、洗礼者ヨハネより偉大な者は現れなかった。〉(マタイ 11:11)とまで言っています。しかし、徹底的な生き方をしたヨハネもまた、当時のファリサイ派とは律法の捕らえ方は違うにしても、究極的には律法を守って義人となることを求めました。律法遵守を基準とする限り、「義人」として生きていくことは可能かもしれません。けれども、それは人間に本質的に内包される「罪」の問題に解決を与えてはくれません。なぜなら、「罪」は「悔い改めにふさわしい実を結ぶ」生き方によって克服されるものではないからです。

確かに「罪」は行為として表面に現れて初めて「罪」として認知されます。しかし、その「罪」の源は「心の中」にあります。〈誰でもある女を見ながら、彼女への欲情を覚えてしまう者は、自分の心の中ですでに彼女と姦淫を犯したのである〉(マタイ 5:28)。このように、「心の中」にある「罪」の源までも克服することは出来ません。イエスは、〈口から出てくるものは、こころから出てくるので、これこそ人を穢す。悪意、殺意、姦淫、みだらな行い、盗み、偽証、悪口などは、心から出てくるからである。これが人を穢す〉(マタイ 5:28)と言われました。「心の中」から湧き出てくる罪が人を汚すのであって、人は罪の根源までも克服することはできないのです。イエスは、絶えず物事の根源に遡って考える人でした。

しかし、それにもかかわらず、神はその人間を生かすのです。人間は、その罪がいくら深くても、またその罪を意識していようがまいが、一方的に神の恵みによって赦されているのだ。イエスは十字架にかけられるとき、隣の強盗に〈はつきり言うておくが、あなたは今日わたしと一緒に樂園にいる〉(ルカ 24:43)と言われたように、どんな罪人も赦されたのです。イエスが信じる神は、因果応報の神ではありません。〈悔い改めにふさわしい実を結〉ばなくても、人々を赦す神です。神の赦しは、悔い改めを条件に与えられるものではなく、すべての人に降り注ぐ雨や太陽の光のように、すべての人間に徹底的に無前提・無条件に与えられる圧倒的な恵みです。それがイエスが発見した神観でした。ヨハネの神とまったく違います。神観そのものが違うのです。

### ★ マルコのメッセージ、新しい酒は新しい皮袋に

イエスとヨハネの思想の違いについて、マルコ福音書の記者は次のように記しています。人々から〈ヨハネの弟子たちとファリサイ派の人たちは断食をしているのにあなたはなぜ断食をしないのか〉と問われたのに対して、イエスは、〈花婿と一緒にいるのに、婚礼の客は断食できるだろうか。花婿と一緒にいるかぎり、断食はできない。(中略)だれも、織りたての布から布切れを取って、古い服に継ぎを当てたりはしない。そんなことをすれば、新しい布切れが古い服を引き裂き、破れはいつそうひどくなる。また、だれも、新しいぶどう酒を古い革袋に入れたりはしない。そんなことをすれば、ぶどう酒は革袋を破り、ぶどう酒も革袋もだめになる。新しいぶどう酒は、新し

い革袋に入れるものだ。> (マルコ 2: 18~22) と応えています。だからイエスは、自ら弟子たちに洗礼を授けたことはありませんでした。

「神の支配」が今到来したのだという考えに立つイエスの視点からは、ヨハネの断食は婚礼の宴に断食するようなもの、に写ったでしょう。ヨハネの教えは「古い布」であって、イエスの新しい布はまったく次元の異なる思想だ。イエスの考えはヨハネの思想を受け継いだものではなく、共存することもできない。新しい酒は新しい皮袋が相応しいのだ、と言いたいのです。イエスとヨハネの間には、決定的な断絶がある、その説教には雲泥の差、天地の開きがある。

教会は、このマルコのメッセージを正しく聞いてきませんでした。マルコは、最初に福音書を書いた人です。それは、初代教会の指導者たち（ペテロ、ヤコブ、パウロなど）がイエスの福音と言う時、イエスが生きた生の生き様を素通りして十字架と復活の信仰のみを語っていたからです。そのことを最も典型的に語ったのはパウロです。パウロは、<ユダヤ人は徴を求め、ギリシヤ人は知恵を探しますが、わたしたちは十字架に付けられたキリストを述べ伝えています。> (I コリント 1: 22~23) と述べ、「十字架に付けられたキリスト」だけが大事なことであって、イエスが何を語り何をされたかはどうでも良いことだと見做しました。それをもっともはっきりと言っているのが、II コリント 5: 16 の言葉です。<それで、わたしたちは、今後誰をも肉にしたがって知ろうとはしません>。この「肉にしたがってキリストを知る」というのは、イエスが何を語り、何をされたかを知ることです。パウロは、イエスのことを知りたいとは思わないし、何も知る必要はない、と言い切っているのです。

そういう宣教が主流であった時に、マルコはあの十字架と復活のキリストだけが福音ではなく、イエスが何を語り、何をされたかということの中に、生きたイエスの言葉と振る舞いの中に「福音」が示されている、それを書き留めなければならないと考えたのです。そこで、イエスの生きた振る舞いと言葉伝承を集めて福音書を書きました。<私が来たのは義人を招くためではなく、罪人を招くためである> (マルコ 2: 17) というイエスの言葉を、ルカは「罪人を招いて悔い改めさせるため」(ルカ 5: 32) と書き加えています。「悔い改めさせる」という言葉が余計です。このところをマタイは変えていません (マタイ 9: 13)。この違いは極めて重要です。つまりルカが言いたいのは、イエスが来られた目的は、「罪人を招く」のではなく、「罪人を招いて悔い改めさせる」ことだ、というのです。罪人を招いて、まっとうな人間、義人にするのがイエスの目的だということですから、言葉の意味を逆の方向に変えてしまいました。つまり、イエスが来られた目的が、罪人を招いて<いのち>を喜び合うのではなく、「悔い改め=律法を守って」正しい立派な人間にすることだ、というのです。ルカは「悔い改め」を強調します。ルカの「園丁のたとえ話」もそうですね。

マタイは、下記のように律法についてもっと強い言い方をしています。有名な「山上の説教」の一部です。<わたしが来たのは律法や預言者を廃止するためだ、と思っってはならない。廃止するためではなく、完成するためである。はっきり言うておく。すべてのことが実現し、天地が消えうせるまで、律法の文字から一点一画も消え去ることはない。だから、これらの最も小さな掟の一つでも破り、そうするようにと人に教える者は、天の国で最も小さい者と呼ばれる。しかし、それを守り、そうするようにと人に教える者は、天の国で大いなる者と呼ばれる。言うておくが、あなたがたの義

が律法学者やファリサイ派の人々の義にまさっていなければ、あなたがたは決して天の国に入ることができない> (マタイ 5 : 17~20)。

マタイは、「律法を守る」ことがもっとも大事なことを考えていましたので、マタイにとってイエスは「義の教師」でなければならないのです。当時のファリサイ派や律法学者に対するマタイの批判は、彼らは<モーセの座についている。だから彼らの言うことは、全て行い、また、守りなさい。しかし、彼らの行いは、見倣ってはならない。言うだけで、実行しないからである> (マタイ 22 : 2~3) と痛烈です。つまり、言っていることは正しいが、言うだけで実行しないからダメなのだ、偽善者なのだということです。律法学者に勝るには、律法をすべて行い、守ることであり、そうすれば神から義人として求められ、天国に入ることができると考えたのです。当時の律法学者やファリサイ人と比べれば良質ではありますが、マタイはもっと徹底した律法主義です。律法を守れない多くの人々のことが、まったく考えられていないのです。

マルコを無視しようとする勢力が強く、大きかったのでしょう。やがて、ルカやマタイの考え方が教会の主流を占め、今日に至っているのです。マルコ福音書が残されていて良かった、と思います。ルカやマタイの記事を批判的に見るが多くなりましたが、ルカやマタイがすべて間違っていると断言しているわけではありません。それぞれ、別の角度からイエスを見ていることと、多様な資料が集められたことは、それだけ豊富な材料でイエス像を復元することが可能になったということです。

マルコが福音書を初めて書いた背景を考えてみましたが、考えてみれば、イエスがどのように考えて発言し行動したのか、その生全体の帰結が十字架であったはずですが、両者を分離することはできません。マルコが言うように、生前のイエスの振る舞いと言葉抜きに、十字架の死の意味は語れないと思います。

## ★ 「原罪」なんてあるの？

教会は、いまだに「罪の許しを得させるための悔い改めの洗礼」を継承しています。昔のように律法を守らなかった罪とは言いませんが、人間は生まれながらにして罪人なのだ、本人が気づかずに犯している罪、原罪を負っているのだ。イエスの十字架のあがないによって赦しを得、人は初めて新しい命に生きるのだ、そういう論理を使ってきましたし、今もそうです。それでよいのでしょうか。教会は、求道者にまず自分の罪を認めさせ、その上でイエスの十字架による罪の許しと洗礼という順序が重んじられます。罪の許しを伝える前に、たくさんの「罪人」を作らなければならないのです。

「人間は生まれながらにして罪人なのだ」とか「原罪を負っている」なんていうことはあるのでしょうか。この原罪論の根拠は、パウロの次の言葉です。<このようなわけで、一人の人によって罪が世に入り、罪によって死が入り込んだように、死はすべての人に及んだのです。すべての人が罪を犯したからです> (ローマ 5 : 13)。「一人の人」というのはアダムです。パウロは、アダムが禁断の木の実を食べたことによって人類に罪が入り込んで全ての人に及んだ、だから人はすべて死ぬのだと言います。罪人の元祖にされてしまうのでは、アダムが可哀想です。

ところが、そのすぐ後に、「すべての人が罪を犯したからです」と補足的に書かれています。創造神話の中に「神に似せて造られた」人とありますが、それは「神は人間が自由意思を持つように造られた」というのが本当の意味です。パウロが言うように、アダムの罪が自動的に全人類の罪になるという考えと、一人ひとりの人間の自由意思で「罪を犯したから」というのは矛盾しています。後半の言葉が人間の罪の責任をアダムに転嫁することを否定しているのです。パウロの論理には無理があります。それを根拠に、「人間が生まれながらにして罪人」などということはいえないと思います。人間は、罪を犯すのも自由な意志で行うからです。

アダムの罪は、わたしたちの罪であるはずはありません。わたしたちは、アダムのように禁断の木の実を食べたことはありません。アダムの罪とわたしたちの罪とは、無関係です。人の罪の責任は、個人個人が神の前で負うべきことです

## VI イエスの十字架の死の意味

### ★ それでも「罪」があるわたしたち

それでもわたしは、人間に罪を認めます。人間に本質的に内包される「罪の源」は人間の「心の中」にあります。〈だれでもある女を見ながら彼女への欲情を覚えてしまう者は、自分の心の中ですでに姦淫を犯したのである〉（マタイ 5:28）。男ならばだれでもそうだとはいませんが、少なくともわたしは欲情を覚えてしまうことがしばしばあります。また弟子たちが十字架に向かうイエスを裏切って逃げてしまったのは、彼らの自己保身のためですが、同じような状況におかれれば、わたしもイエスを捨てて逃げ去るでしょう。イエスを裏切った弟子たちの「罪」は、私の心の中にもあります。

追いはぎに半殺しにあって血を流している人を目の当たりにする状況におかれれば、わたしはその人との接触を避けて「向こうの道を通って」行きたがる人間であることを、率直に認めなければなりません。関わりたくないと思うからです。どんな理由があれ、それは赦されない罪だと思いません。イエスのように、徹底的に苦しんでいる人たちと一緒に生きることも、そうありたいと願っていても、わたしには十分にできません。自己保身や見栄が自分をがんじがらめにしているからです。このように、わたしの「罪」を認めざるを得ません。それは目に見えるかたちでの「罪」ではなく、人間の本質に内在する「罪」「心の中の罪」です。このような罪は、律法学者やファリサイ派のいう意味での律法違反の「罪」ではありません。時代を超えた人類普遍の問題です。

現代日本では、マスコミをにぎわすような殺人事件がしばしば起こります。それらの報道を詳しく追うと、殺人事件を引き起こすような人と自分とは、紙一重の差に過ぎないと思うことが多くあります。自分もそのように幼少の頃から劣悪な環境に置かれていれば、同じような犯罪を犯す可能性があると思わざるを得ません。環境がすべての人間の行動を規定しているとは思いませんが、人間は弱いので悪い環境の中で生きているうちに罪を犯す可能性が高くなるのではないのでしょうか。イエスが教えた「主の祈り」には、「わたしたちを試みにあわせず、悪より救い出したまえ」とあります。試みに出会うと悪に走ってしまう弱い人間であること知っているのに、イエスはこのように

祈ることを教えたのだと思います。このように考えると、神の前では、人間は皆、チョコチョコボなのではないか、みな罪人ではないかと思います。

イエスは、「すべての罪が赦される」と言っても、人間に罪はないと言っているわけではありません。犯した罪は償わなければなりません。イエスの神は、人間の犯した罪の軽重に関わらず、罪を持ったままの生身の人間を受け入れ、人を生かそうとされているのです。罪を裁いてその人が立ち直れなくするよりも、罪があってもそのまま赦して受け入れ、人が積極的に前向きに生きようになることを望んでおられるのです。そのように神を信じる人は、もはや罪を犯すことがなくなっていく、あるいは少なくなっていくのではないのでしょうか。

### ★ 弟子たちの発見、イエスの死は贖罪の死だった！

教会やキリスト者は、イエスが十字架にかかってわれわれの罪を贖ってくださったので、わたしたちの罪は赦された、と教えられてきました。わたしもこれまで、ずっとそのように考えてきました。

イエスの十字架の死は、われらの罪の贖罪のため、贖いのための死、身代わりの死であったとする考え方を、贖罪論と言います。旧約聖書の時代は、律法を犯した個々人の罪を神殿で子羊や子牛などの動物を贖いの供え物・犠牲として焼くことによって人間の罪が清められる、人の罪を清めるために動物が身代わりとなるという思想から、神殿で祭司たちによってその儀式が執り行われていました。キリスト教は、イエスがまさに人間の罪のために捧げられた神の子羊、と解釈したのです。

イエスこそメシアだと思って従ってきたにもかかわらず、十字架上のイエスの惨めな死を目の当たりにした弟子たちは、自分たちはイエスを裏切ってしまった、イエスを十字架に付けたのは自分だ、という深い自責の念にとらわれていたと思います。その弟子たちが、イエスの生と死の意味を探るために旧約聖書を読み、イザヤ書 53 章の「苦難の僕」に行き当たりました。あのイエスこそ、ここに書かれている「苦難の僕」だった、イエスはわれわれの罪を負って死なれたのだ、と弟子たちは解釈したのです。大変感動的な聖書の箇所ですので、下に引用します。

くわたしたちの聞いたことを、誰が信じえようか。

主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。

乾いた地に埋もれた根から生え出た若枝のように

この人は主の前に育った。見るべき面影はなく

輝かしい風格も、好ましい容姿もない。彼は軽蔑され、人々に見捨てられ

多くの痛みを負い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し

わたしたちは彼を軽蔑し、無視していた。彼が担ったのはわたしたちの病

彼が負ったのはわたしたちの痛みであったのに

わたしたちは思っていた

神の手にかかり、打たれたから

彼は苦しんでいるのだ、と。

彼が刺し貫かれたのは

わたしたちの背きのためであり

彼が打ち砕かれたのは  
わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって  
わたしたちに平和が与えられ  
彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。  
わたしたちは羊の群れ  
道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて  
主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み  
彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように  
毛を切る者の前に物を言わない羊のように  
彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。  
彼の時代の誰が思い巡らしたであろうか  
わたしの民の背きのゆえに、彼が神の手にかかり  
命ある者の地から断たれたことを。

(イザヤ 53 : 1~8)

ここに描かれた「苦難の僕」の姿は、まさにイエスの姿そのもののようには思います。弟子たちは驚いたことでしょう。＜彼が刺し貫かれたのはわたしたちの背きのためであり/彼が打ち砕かれたのは/わたしたちの咎のためであった。彼の受けた懲らしめによって/わたしたちに平和が与えられ/彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。/わたしたちは羊の群れ/道を誤り、それぞれの方角に向かって行った。そのわたしたちの罪をすべて/主は彼に負わせられた。苦役を課せられて、かがみ込み/彼は口を開かなかった。屠り場に引かれる小羊のように/毛を切る者の前に物を言わない羊のように/彼は口を開かなかった。捕らえられ、裁きを受けて、彼は命を取られた。＞という言葉に。弟子たちは、苦難の僕がイエスだ、イエスを裏切った自分の罪を赦すためにイエスは十字架にかかられたことを発見したのです。イエスの死は、すでに聖書に預言されていたのであり、預言の成就だと考えました。イエスは神から遣わされたメシアだった、イエスの死によって、自分の裏切りの罪は赦されたのだ、それが弟子たちの「罪の赦し」の体験だったのです。

イエスを裏切ってしまったという屈折した思いを持った弟子たちが、イエスの死を自分たちの罪を赦す贖罪の死と考えたのは、よく分かります。弟子たちとイエスの関わりが深ければ深いほど、その思いは痛切であったことは容易に想像できます。弟子たちは、次第にそのように考えることによって神から力を得て（復活体験）、まるで別人のようにイエスを述べ伝える活動に集中したのです。それが福音書に証言として書かれているのですが、それはそれで良いのです。

問題は、これまでのキリスト教会が、イエスの死を贖罪の死であるとする教理を認めること、それを洗礼の条件にし、それ以外の解釈を許さないとしていることです。しかし考えてみると、イエスの生前の言動をまったく知らない人々が、イエスの十字架の死を自分の罪を負った死であったと考えるのは、無理があるのではないのでしょうか。時間的にも空間的にも遠く離れたイエスの十字架の死が、今のわたしが持っている罪、あるいはわたしが過去に犯した罪のためであった、とはどうしても考えにくいのです。われわれはイエスの生身の振る舞いと言葉を直接知らないのですから。

イエスの死とわたしとは直接には関係がありません。ディートリッヒ・ボンヘッフアーの死は、わたしとは直接関わりがないのと同様です。

わたしは、イエスの死を必ずしも人間の罪のための贖罪の死と考えなくてもよいと思っています。

★ イエスの十字架は、人間の罪の深淵を暴露している

確かに、イエスの十字架への道で人々の罪が明らかにされます。

サンヘドリンというユダヤ議会の大祭司や長老たちは、神殿体制を破壊すると思えてイエスの言動に怒り、まったく罪のないイエスを十字架にかけて殺しました。結局は神殿体制を守ることによって自分たちの利益を確保するために、無実の人を殺す犯罪に加担しました。

ポンテオ・ピラトはローマの総督として、イエスが無実だと知りながら、群衆の声に押されて十字架刑を執行しました。政治家としての政治生命と群衆の声を天秤にかけ、無実の人間を殺したのです。群衆が十字架にかけよと言ったのだから、と責任を転嫁するのです。その罪は明らかです。国家権力の恐ろしさを思わざるを得ません。

群衆は、イエスをもしかしたらメシアかもしれないと、一時は拍手喝采して迎えましたが、扇動にあって付和雷同し、＜イエスではなく、バラバを許せ！＞と言ってイエスの処刑を求めました。多数の人間の中に紛れて、主体的な判断を放棄するのです。付和雷同という無責任の罪です。

もっともイエスの近くにおいて宣教活動を担った弟子たち、その代表的な弟子であるペテロは、鶏が三度泣く前に「イエスを知らない」と言ってイエスを裏切りました。「他の弟子たちもみな逃げていった」と書かれています。この裏切りという行為がイエスを死に追いやりました。何人かの女の弟子たちが、かろうじてイエスの十字架刑の最後まで見守り、復活に立ち会うことになりましたが・・・。

このように、イエスの十字架の処刑に関わった全ての人間に大きな罪を認めなければなりません。それらの罪は、何らかの仕方ですべての人間が持っている罪を表しています。わたしも、十字架の場面に居合わせたら、体制維持のために汲々とするユダヤ人の大祭司や長老たちと同様の行動をとったかもしれません。ピラトのように優柔不断で無責任な決定を行ってしまったかもしれません。自己保身のために最愛の師まで裏切って、十字架を負わせたかもしれません。

このように、十字架が人間の罪を暴くのです。そこに、人間の暗黒を観ます。絶望的な人間の罪の深淵を照らすのです。それは別の言葉で言えば、「最も小さいもののひとりであったイエス」と連帯することから遠ざかって生きようとする罪です。そこにある罪はすべて自分の中にもある、イエスを十字架に付けたのは自分だと思ふことがあります。でも、イエスの死と今のわたしたちとは、直接には関わり合いはありません。

今のわたしたちがイエスの死を贖罪の死と捉えると、イエスの死の意味が個人的なものにすり替えられ、感情的（感傷的）に捉えることになってしまう危険性があると考えます。イエスの贖罪の死がなければ、わたしとイエスとの繋がりがなくなってしまうと考える人は、それはそれで良いと思います。しかし、イエスの死は、国家権力の暴力による以外の何ものでもありません。国家権力とは、まったく罪のない人間、苦しむ人々と連帯して生きる人々を、都合が悪くなると平気で弾圧し殺すのです。国家権力の恐ろしさ、むごさを認識することが大事であり、そのために国家権

力を監視していくこと、場合によってはそれに抵抗して生きることが求められています。その自覚を抜きに、イエスが自分個人の罪を負って十字架にかかって下さったと単純に喜ぶのは、感傷的ではないでしょうか。

従来の教会は、洗礼（沈めの式）を、キリストの贖罪の功績によって、生まれながら持っている「原罪」、およびそれまでに犯したすべての「自分の罪」（人間が生まれてから犯した罪のこと）が赦されるという教理に従って儀式を行ってきました。キリストの死を贖罪の死と信じ告白しなければ、洗礼を受けることはできません。洗礼を受けていない者は、聖餐をも受けられません。

しかし、すでに見てきたように、イエスの神は、イエスの贖罪死を信じようと信じまいと、何の前提もなしに、無条件に、どんなに罪のある人間をも受け入れ、人がその<いのち>を輝かせて生かして下さるのです。それで十分ではないでしょうか。このような驚くべき神の姿を、イエスが初めて発見して、わたしたちに明らかにされたのです。十字架の死にいたるまで、一人の人間として徹底的に悪と闘ったが故に、神はイエスをよみがえらされたのだと思います。死で終わりではないことを示すために、……。そう言う意味で、イエスはまさに、わたしにとって救い主＝キリストです。

<神の国はこのような者たちのものである>（マルコ 10：13～16）と言って、子どもたちを抱いて祝福されたイエスは、自分の死は贖罪の死と信じたから、その赤ちゃんを祝福して「神の国に入る」と言ったのでしょうか。そんなことはありえませんか。子どものように、「神の国を受け入れる人」だから祝福されたのです。

ところで「洗礼」ですが、先に触れた本田哲郎神父によれば、本来のバプテスマの意味は、穢れを洗い流す、とか浄・不浄の問題とは関係がなく、地上のもっとも低いところ（川）、すなわち社会の底辺に身を沈める意味をこめて行う儀式、「沈めの式」と訳しました。社会のもっとも低み（社会的な弱者）の側に立って生きるための「沈めの式」に、イエスも共感してヨハネから洗礼（沈めの式）を受けたのではないかと思います。

そう考えると、洗礼の意味がまったく違ってきます。本田神父が言うような意味での「洗礼」ならば、「洗礼」を受けることはすばらしいことだと思います。イエスの死を贖罪の死と信じなくても、イエスが志向した、苦しむ人々と連帯して生きるための沈めの式、小さくされた人々との連帯を決意する儀式として行うことは、大きな意味があると考えからです。

さらに言えば、どのような「洗礼」を受けているかということにもかかわりなく、イエスが示された神を信じる、あるいは信じようとするならば、その人はキリスト者なのではないでしょうか。

考えを深めていくうちに、わたしは、キリスト教の根幹であると言われている贖罪論を完全に否定するという結論に導かれてきました。しかしわたしには、贖罪論を完全に否定してしまってもいいのか、まだ多少の迷いがあります。また、復活をどう捕らえたらよいのでしょうか。話はだんだん深みにはまってきてしまったようです。これ以上の深入りは、キリスト教の教義の根幹の問題を論議することになるので、別の文書を作ることを考えたほうがよさそうです。この辺で、深入りをやめます。いつか書いてみたいと思いますが、……。



## VII 関係の中で生かされてある<いのち>

### ★ イエスの発見、「神の支配」、生かされてある<いのち>

最近読んだ上村 静著『宗教の倒錯、ユダヤ教、イエス・キリスト教』（岩波書店）は、わたしにとって驚きの体験でした。これまでわたしが疑問に思ってきたことに大きな光を当ててくれたからです。それで、イエスが「野の花、空のカラス」を見て「神の支配」を発見したことの論考を参考にしつつ、わたしの考えを入れてこの文章を書いてきました。この随想の基本的な筋立ては、上記の書物によります。この章は、上村さんの結論部分ですが、できるだけわたしの言葉で表現してみました。

さて、イエスの語る「神の支配」は、現実をあきらめて終末を待ち望むのではなく、今、生かされてあるという事実に信頼して、与えられた<いのち>を生き抜くことを促すものです。それは、貧困や差別などの苦しみから未来に希望を持つことをあきらめ、自己否定するのではなく、それを克服する道を示すものでした。

イエスは言います。<明日のことまで思い悩むな。なぜなら、明日は明日自身が思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である>（マタイ 6:36）と。つまり、明日に希望は持てなくても、未来に希望を持てなくても、その日一日を生きれば十分だ、明日は明日自身が思い悩むのであって、あなたが思い悩む必要はない、明日のこと・未来のことは神に任せよ、と。

確かに今日という日を生きることは、決して楽なことではありません。けれども、だからといって将来への不安に固執するならば、<今>を生きることもできません。一瞬一瞬に<いのち>を輝かせて生きること、それが神によって生かされてある<いのち>を生きることになるのです。イエスの活動は、「神の支配」への確信に基づいています。しかしそれは、終末の到来の確信ではありません。むしろ、創造主たる神への信頼です。神はすべての被造物を、その業績とは無関係に、あるがままにそのままで生かしておられます。カラスや野の花が、一瞬一瞬いのちを輝かせて生かされているように、・・・。

イエスは、そのことを自然から学んだのです。汚れたカラス、「罪」と定められているカラスを養い、人間に労働の苦しみを与える雑草をより良く装う神。それは人間の業績とは無関係に、<いのち>を生かしている神、この世における「神の支配」の発見であったのです。「よい者」たりえない自分、それでも生かされてある自分を洞察しました。そのことを、人間の価値基準からすればもっとも無価値と思われていたカラスや雑草から学んだが故に、この世で無価値とされ、蔑まれている人々とカラスや雑草とが同じだという認識とも通い合ったのです。人間であれ被造物であれ、いかなるものも、生かされてある<いのち>なのだ。

イエスは、「生かされ」ている被造物そのものは相対的なものですが、他方でそれが、「神によって」生かされている存在であること、すなわち絶対的な価値を持つものとして肯定されていることを明らかにしました。

<いのち>とは、生物学的な生命だけでなく、人格、生全体、自分らしく生きること、そういったく生、生きること>にかかわる総体を表します。ひとつひとつの<いのち>に、他との比較によらない絶対的・自立的価値がある。存在そのもの、存在しているという事実だけで十分なのです。業績のための努力はその人自身の生の質を高める可能性を持ちますが、他者との比較における価値を上げるわけではありません。「関係の中で」とは、<いのち>に絶対的価値があるといっても、それはなおやはり相対的な存在なのであり、他者とのかかわり合いの中でこそ<いのち>は十全に生き、また生かされるからです。

ここで「他者とのかかわり合い」と言いましたが、その他者とは人間とは限りません。すべての被造物を考えています。つまり、人は自然（大地、空気、水、植物などの生き物）がなければ生きていくことはできませんし、他者とのかかわり合い（社会）も生きていくための重要な要素です。ロビンソン・クルーソーも、ただ孤独に生きたのではなく、動物たちとのかかわりの中で生きることができました。それらのかかわり合いの中でこそ、<いのち>が生かされるのです。イエスはこの洞察を、「神の支配」という言葉で表しました。

しかし、後一世紀には、「神の支配」という言葉で終末論的な応報が期待されていました。終わりの時に神の支配が完成するのだ、と。それは「今は神が働いていない」という神への不信の裏返しであり、その不信が「神がユダヤ人を選んでくださったのだから、自分たちは滅びることはないのだ」というユダヤ選民思想となり、「神から与えられた律法を守ることこそユダヤ人の誉れだ」として律法主義に走っていったのでした。「神の支配」という言葉は、選民思想と律法主義の根拠となっていたのです。それゆえ、あえて同じ言葉を用いて、その意味内容を変えることで、被造物を生かす神への信頼を取り戻そうとしたのです。<相対的根拠>しか見出さない人々に対し、<絶対的根拠>を提示しようとしたのです。それは視点の転換、異なる視点から見ることを促すことでした。

## ★ 失われた<いのち>を回復させるために

イエスの「神の支配」の発見は、自然から人間社会に目が向けられます。「罪人」といわれる人々に対するイエスの振る舞いに注目しましょう。

<数日後、イエスが再びカファルナウムに来られると、家におられることが知れ渡り、大勢の人が集まったので、戸口の辺りまですきまもないほどになった。イエスが御言葉を語っておられると、四人の男が中風の人を運んで来た。しかし、群衆に阻まれて、イエスのもとに連れて行くことができなかつたので、イエスがおられる辺りの屋根をはがして穴をあけ、病人の寝ている床をつり降ろした。イエスはその人たちの信仰を見て、中風の人に、「子よ、あなたの罪は赦される」と言われた。ところが、そこに律法学者が数人座っていて、心の中であれこれと考えた。「この人は、なぜこういうことを口にするのか。神を冒瀆している。神おひとりのほかに、いったいだれが、罪を赦すことができるだろうか。」イエスは、彼らが心の中で考えていることを、御自分の霊の力ですぐに知って言われた。「なぜ、そんな考えを心に抱くのか。中風の人に『あなたの罪は赦される』と言うのと、『起きて、床を担いで歩け』と言うのと、どち

らが易しいか。人の子が地上で罪を赦す権威を持っていることを知らせよう。」そして、中風の人に言われた。「わたしはあなたに言う。起き上がり、床を担いで家に帰りなさい。」その人は起き上がり、すぐに床を担いで、皆のしている前を出て行った。人々は皆驚き、「このようなことは、今まで見たことがない」と言って、神を賛美した。(マルコ2：1～12)

上のマルコの記事にあるように、当時は病気になるのは本人の罪の故だと考えられていたので、「中風」の病人は中風が完治しない限り、社会に復帰することはできませんでした。しかしイエスは、四人の友人の信仰を見て＜あなたの罪は赦された、起きて床を担いで歩け＞と言いました。そして、律法学者と「罪の赦し」について、イエスとの論争になります。

イエスの憤りは、「本人の罪と病気とは関係ない。罪の結果が病であるとする勝手な律法解釈が、人々を罪人にしてしまうのだ。だからわたしは宣言する。この人に罪はないことを証明するために」といって奇跡の癒しを行ったのです。病は罪の結果とするユダヤ教の教理が、どんなに多くの人々を共同体から排除させ、苦しめていたかを、イエスはよく知っていたからです。それは、障がい者も同じです。イエスの奇跡物語には、障がい者の癒しの記事がたくさんあります。精神障がい者の記事も多くあります。彼らは、共同体から隔離されて生きていました。村はずれの墓場とかに追いやられていました。このイエスの言葉と振る舞いは、たくさんの病人や障がい者の受け入れを拒否していた、当時の社会の根幹を揺るがす行動であったのです。

イエスは、乱暴にも屋根をはがして中風の者を吊りおろした人々の行動に、深く感動したのだと思います。そこには助け合いがあるではありませんか、連帯があるではありませんか。友達の病人の苦しみを自分の苦しみのように思って、腸（はらわた）が千切れるような思いを持って友達を助けるのです。イエスは、そこに「神の国」を見たと思います。

また、イエスは、この記事にあるように罪人の職業である徴税人レビを弟子とし、徴税人やその他の罪人と一緒に食事をしました。当時、「罪人」と称される人々と食事をすることは律法で禁止されていました。すでに述べたように、当時のユダヤ教は、律法を解釈して驚くほど事細かに細部の規定を作って人々を縛っていました。罪人と食事を共にすることは、そのことによって本人も宗教的に汚れるのだから、律法に反する行為だということです。かくして、たくさんの「罪人」を作り出してきました。

罪深い職業の人々、娼婦、動物の血にかかわる職業、ローマ帝国支配を末端から支える徴税人などの職業などは、職業的な穢れを持つ「罪人」とみなされてきました。職業による差別です。このような人々は、社会の片隅でしか生きられませんでした。その他、多くの食物規定がありました。豚は食べてはいけない。猛禽類などの穢れた動物は食べてはいけないなど。食事の前には入念に手を洗わなければならない。もちろん、「異邦人」「罪人」との会食も規制されました。数えればきりがなほどの律法がありました。

イエスは、それを逆転するのです。イエスは、あえて律法違反になることを承知の上で、人々から忌み嫌われていた徴税人を弟子にし、またその家で大勢の徴税人や「罪人」として食事をし、食物規定や細々とした律法のあり方を根本的に批判したのです。また、＜医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くため

ある。> (マルコ : 17) と言って、社会的に阻害されている人々と食事をする (連帯する) というのですから、人々は驚きを隠せなかったのです。

逆に、「あなたたちこそは、神のため人のためと言いながら、律法に勝手な解釈を加えて人々に重荷を負わせ、人々の自由を縛り、苦しめているのだ」といって、ファイリサイ派や律法学者を批判しました。イエスの言葉は辛辣です。<イエスは言われた。「あなたたち律法の専門家も不幸だ。人には背負いきれない重荷を負わせながら、自分では指一本もその重荷に触れようとしないからだ。あなたたちは不幸だ。自分の先祖が殺した預言者たちの墓を建てているからだ> (ルカ 11 : 46~47) と。

イエスは、別のところで次のように宣言します。<はっきり言うておく。人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。しかし、聖書を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。> (マルコ 3 : 28~29) と。「人の子らが犯す罪やどんな冒涇の言葉も、すべて赦される。」とは過激な言葉ですね。その言葉があまりに過激なので、後代の人々がそっと「しかし、聖書を冒涇する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。」と書き加えてその過激宣言を薄めてしまった、これはマルコ自身の筆ではない、というのが大方の聖書学者が認めていることです。

ここに言われる「罪の赦し」とは、その人たちになんらかの具体的な「罪」(律法違反)を認め、その特定の「罪」が赦されるという字義通りの意味ではなく、その人たちの<いのち>がそのまま、「悔い改め」や特別な仕方での律法遵守などの条件なしに、肯定されているということを示すものです。彼らとの会食は、会食という形で彼らの<いのち>を肯定し、その<いのち>が相互の関係の中で生かされるものであることを示すための、イエスの象徴的な行動です。それは、宗教によって損なわれてしまっていた、失われた<いのち>を回復させるためでありました。

## VIII 十字架を負ってイエスに従う、とは

### ★ 律法は人のためにこそある、「行って、あなたも同じようにしなさい」

イエスは、差別を現実のものとしている民衆に対して、イデオロギー化された律法遵守という大義名分が人間と人間の本来のあり方を阻害している現状を指摘し、本来的に「律法は人のため」であることを提示します。下のルカの記事がそのことを端的に示しています。

<イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のロバに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中

で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」（ルカ 10：30～37）

これは、有名な「良きサマリア人のたとえ」です。聖書の文脈では、ある律法の専門家がイエスを試そうとした、次のような問答をします。＜すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」＞（ルカ 10:25～29）＞。それに対して、「では、わたしの隣人とは誰ですか」と反問します。それに対してイエスが語ったのが、このたとえです。

ここに出てくる祭司・レビ人は、いわゆるユダヤ教の世襲の聖職者で、職業というよりは血統を表します。ユダヤ人の中でもっとも由緒ある出自なのです。本来半殺しにあった人を助ける仕事をするはずの人たちですが、二人とも同じように「道の向こう側を通って」被害者を放置します。それは祭司・レビ人が一般に冷酷な人という意味ではありません。祭司もレビ人も、血を流している死人は穢れているから触れてはならないという律法規定を守ったのです（レビ記 3:1～6）。血は、律法では穢れと考えられていたからです。半殺しで死んでいないかもしれないが、介護しているあいだに死ぬかもしれないからというのです。その時と状況を見無視して勝手に律法を適用して、助けを要する被害者の介護を避けて通ります。彼らは聖職者のくせに冷淡なのではなく、聖職者であるがゆえに、この死にかけた人を避けたのです。まさに律法が形骸化し、イデオロギーと化してしまっていたのです。このたとえは、当時のユダヤ教の律法主義に対するイエスの痛烈な批判です。

そうではなくて、サマリア人のように「その人を見て哀れに思う」（腸が千切るような思いを持つ）ことが律法のはずです。「哀れに思う」という普通の人間が抱く感情こそ律法のはずです。律法について理論的に言葉の上で正しい答えをしても、心がない人は決してそのような行動を取らないのです。追い剥ぎに襲われた人の隣人になったのは、ユダヤ人が忌み嫌っていたサマリア人でした。ここに律法学者・ファリサイ派に対するイエスの痛烈な皮肉がこめられています。サマリア人というのは、エルサレムとは別の独自の神殿を持ったためにユダヤ人から敵視され、外国からの移住者と混血したと蔑称された人々でした。ユダヤ人からみれば、サマリア人は異民族の中でも最も穢れた者だったのです。

イエスは、律法の専門家に＜あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。＞と問います。律法の専門家は「その人を助けた人です」と言わざるを得ませんでした。公衆の面前で「それはサマリア人です」と言えなかったのでしょうか。もしそう言っていたら、その律法の専門家は周囲から糾弾されることは明らかで、それを恐れたから言えなかったのです。イエスは、民族差別をも克服していました。

そこでイエスは、＜行って、あなたも同じようにしなさい＞と言いました。それは、人々の苦しみをみて腸が千切れるような心を持って、苦しむ人々とともに歩みなさい、それが律法なのだ、という意味です。このサマリア人の行為が、イエスに従う、ということです。

イエスの活動は、多少成功したようです。少なからぬ奇跡物語が残されていることは、社会復帰を果たした「罪人」がいたことを示唆します。しかし、自らを「義人」と信じて疑わない宗教指導者や金持ちは聞く耳を持たなかったし、イエスの言葉はこうした人たちへの辛辣な批判が少なくありません。彼らは宗教的敬虔を装ってはいても、実際には民衆への現実的な差別と貧困の元凶なのでした。

やがて、イエスの批判は、神殿体制へと向かいます。ですがそれは、ガリラヤの田舎者が太刀打ちできる相手ではありませんでした。結局は、政治犯として十字架刑に処せられ、わずか 30 数歳で悲惨な最期を遂げました。

### ★ 「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれた」こと

イエスは、＜悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださる＞（マタイ 5：45）神を伝え、神によって生かされてある＜いのち＞の尊厳を回復しました。どんな罪人も赦される、とまで言い切りました。するとわたしたちは、イエスは人々に倫理や道徳など必要ない、規範となるものは必要ないと言っているのだろうか、という疑問が生じます。決してそうではありません。

イエスは、＜それから、群衆を弟子たちと共に呼び寄せて言われた。「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである。＞

（マルコ 8：34～35）と命じました。「自分の十字架を背負って」というのは、どんな困難な事柄でもそれを自分の課題と自覚し、その重荷を命がけで背負っていく、という意味だと思えます。イエスに従うというのは、大変なことです。イエスは、人間にきわめて高い倫理性を要求しておられるのです。

マタイ福音書にしか載っていない記事ですが、下記の説教は、イエスが十字架にかけられる直前という文脈にマタイが置いたイエスのたとえ話です。イエスの最後の説教という意味で、マタイが重視していたたとえ話と見てよいでしょう。

＜「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えて来るとき、その栄光の座に着く。そして、すべての国の民がその前に集められると、羊飼いが羊と山羊を分けるように、彼らをより分け、羊を右に、山羊を左に置く。そこで、王は右側にいる人たちに言う。『さあ、わたしの父に祝福された人たち、天地創造の時からお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』すると、正しい人たちが王に答える。『主よ、いつわたしたちは、飢えておられるのを見て食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て飲み物を差し上げたのでしょうか。いつ、旅を

しておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、牢におられたりするのを見て、お訪ねしたでしょうか。』>  
(マタイ 25 : 31~39)

と答えます。その時の王の答えが重要です。<『はっきり言うておく。わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。』>と。もっと見小さい者の一人」とは王の兄弟なのだ、神の兄弟だということです。右側の人々は、そのような人々が神の兄弟なんて、思いもしなかったのです。しかし、その行為は、神に対してした行為と同じだと言います。

その逆が、左側にいる人々の反応です。彼らは、飢え、乾き、旅人、裸、牢獄、病気のどれも、本人が犯した罪の結果だと考えて、手助けすることすら考えなかったのです。その結果、神の兄弟を放置し、神からの裁きを受けるのです。

このたとえ話で決定的に重要なことは、神の眼は、苦しんでいる人々に向けられているということです。イエスがそうであったように、具体的に苦しんでいる人々と交わり、食事をともにし、その苦しみを一緒に担い、ともに歩むということが最も大事なことです。社会的・経済的に重要な貢献をするとか、他にも大事なことがあるのではなく、苦しんでいる人々と連帯する以外のことは神の関心事ではない、と言っているのです。

## ★ 「貧しい人々は、幸いである」

似た事柄を、別の言葉で言っている箇所があります。有名な「幸いなるかな」の言葉です。

くさて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「貧しい人々は、幸いである、

神の国はあなたがたのものである。

今飢えている人々は、幸いである、

あなたがたは満たされる。

今泣いている人々は、幸いである、

あなたがたは笑うようになる。

人々に憎まれるとき、また、人の子のために追い出され、ののしられ、汚名を着せ

られるとき、

あなたがたは幸いである。

その日には、喜び踊りなさい。天には大きな報いがある。

この人々の先祖も、預言者たちに同じことをしたのである。

しかし、富んでいるあなたがたは、不幸である、

あなたがたはもう慰めを受けている。

今満腹している人々、あなたがたは、不幸である、

あなたがたは飢えるようになる。今笑っている人々は、不幸である、

あなたがたは悲しみ泣くようになる。

すべての人にほめられるとき、あなたがたは不幸である。この人々の先祖も、偽  
預言者たちに  
同じことをしたのである。」

(ルカ 6 : 20~26)

イエスらしい語り口ですね。貧しい人々、今飢えている人々、今泣いている人々、人々に憎まれるとき、人の子のために追い出され、罵られ、汚名を着せられるときは、どれも皆、辛く苦しい時です。だれもこんな風にはなりたくないと思っています。ところがイエスは、その時こそ幸せだ、と言うのです。今貧しい人も、神が富ませてくださる、今飢えている人は、神がその空腹を満たしてくださる、今泣いている人は、神が悲しみに変えて喜びを与えてくださる、それを信じなさいと言うのです。逆に、今富んでいる人はもう慰めを受けているから不幸だ、今笑っている人は悲しみ泣くようになるのだから不幸だと思え、と言います。

人の子のために「追い出され、ののしられ、汚名を着せられるとき」ほど苦しいことはありません。人は誰しも、プライドを傷つけられることほど屈辱感を味わい、人格を無視されるほど苦しいことはありません。でもイエスは、「その日には喜び踊りなさい。天には大きな報いがある」からだ、と言います。今富んでいて満腹していて笑っている人よりも、神の愛の眼差しを受けるのは今貧しく空腹で泣いている人々だ、というのです。ここにもイエスの逆説があります。先に記して最後の審判の場面のたとえ話と同じことが言われていることに驚きます。

前節で述べた「良きサマリア人のたとえ」に見るサマリア人の行為も、「この最も小さい者の一人」のたとえと同様に、人間に厳しい倫理性を問うています。これが、イエスの求めた倫理性です。

## ★ 市民運動を担うということ

現代では、NPO、NGO など社会運動や市民運動を心ある宗教者がその役割を担っていますが、問題が山積しているだけに、もっと大きな勢力となって具体的な問題を解決して欲しいと願っています。ただ、具体的に人々の苦しみと向き合うことがないと、社会的弱者の救済というイデオロギーに変質してしまうことがあります。それが社会運動・市民運動の陥りやすい点で、要注意です。

世の中には解決すべき課題が山積しています。具体的に苦しんでいる人々への手助けが重要だといっても、すべての人がそれに関わるようになることを期待してはいけないと思います。放蕩息子の兄のような、「自分は一生懸命にやっているのに、あの人は何もしない・・・。」という考えが忍び込んでくるのです。人は皆、時と状況によりできないことがあります。病気になったらそれを治すことに集中しなければなりません。体力、気力が衰える高齢になったら、社会的な活動は出来にくくなります。お金がないときもなかなか活動はできません。たくさん問題がある中で、個人が関われることは限られています。

わたしも若い頃や現役の頃は、まえがきで自己紹介したように、いろいろの市民運動をしてきました。主要なものが、流域下水道終末処理場建設反対の市民運動、反管理教育市民運動、愛知



万博会場の自然を守る自然保護運動などです。それは、しなければならぬと自分を打ち叩いて行動を起こしたのではありません。じつは逃げ回っていたのですが、突然、神がわたしに課題を与えたので逃げられなかった、というのが本当のところですが、でも、経験してみればそれは楽しい時間でした。＜疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。＞（マタイ 11：28）という言葉がありますが、それは嘘ではありません。担ってきた重荷が軽く思えることがたくさんありました。

昔、息子が中学生の頃、「お父さんは人のためにばかり生きて、損することばかりしている、どうしてもっと自分自身の生活を楽しんだりしないの！」と、非難がましく言われたことがあります。市民運動にお金を使ってしまい、子どもたちに十分なお小遣いも与えられませんでしたので、そう言われたのです。「その通りかもしれないが、もう少し大人になったら分かるよ！」としか答えられませんでした。イエスの言葉にこういう言葉があります。＜与えなさい。そうすれば、あなたがたにも与えられる。押し入れ、揺すり入れ、あふれるほどに量りをよくして、ふところに入れてもらえる＞と。本当にそうです。不思議なことに、苦しい時にお金が入ったり、必要な時にお金が与えられたりするのです。ひもじい思いをしたことはありますが、不思議と懐にお金が入り、まさに「押し入れ、揺すり入れ」られるような実感を持ったことが何度もありました。

若い頃は元気でしんどい作業をこなしてきたのですが、歳をとるに連れてその気力も体力もなくなってきました。今は、隠居の身です。人間は誰しも、いつかは重要な社会的な課題を与えられるときがあります。その時には、立ち上がりたいものです。

大事なことは、苦しんでいる人達と向き合う方向性だけは持っていたと思います。具体的な活動はできなくても、枯れ木も山の賑わいとして集会に参加することが、主催している人たちにどんなに励ましになることでしょうか。わたしもいろいろの市民運動をしてみて、資金カンパを頂いたとき、涙が出るほど嬉しかったことを思い出します。苦しい中から貴重なお金を出してくださる、その方の心が嬉しいのです。富んでいる人であれば、カンパをするという仕方で、イエスのように貧しくなることができます。そして何よりも、腸が千切れるような思いを持って祈ること、それが最も大切だと思うようになりました。それは、誰でもできます。

先日、ある在日韓国人で日本に帰化した人が主催する集会に参加しました。枯れ木も山の賑わいだと思って……。彼らは、帰国事業で北朝鮮に渡った姉の自由往来を求めて運動しているのです。中心になって活動する彼女は、「日本人なら盆暮れに里帰りするのは当たり前でしょ？しかし、北朝鮮にいる姉は、里帰りしたくてもできない現実をどう思われますか？」と日本人であるわたしたちに問いかけるのです。「大分良くなるはりましたが、在日の人間はほとんどの人が、日本では本名を名乗れないことをご存知ですか？本名を名乗ったとたん、冷たい視線を浴びるのですよ。商売すらできなくなるのですよ！」それらの言葉を聞いて、日本人としてつらい思いになります。今なお民族差別に苦しむ人々が、身の回りにたくさんいることを知らされました。

★ 「ただ、神の国を求めなさい」

さて、最後にもう一度、聖書のこの箇所にもどりましょう。イエスはこの箇所の最後に、〈あなたがたの父は、これらのものがあなたがたに必要なことをご存知である。ただ、神の国を求めなさい。そうすれば、これらのものは加えて与えられる〉と勧めます。

「神の国を求める」とはどういうことでしょうか。聖書学者によれば、原語の「求めなさい」という言葉は、本来は「探しなさい」と訳すべき言葉だと言います。〈求めよ、そうすれば見いだすであろう。探せ、そうすれば見つかるであろう。〉という言葉の、「探せ」という言葉に近いと言うのです。「求めよ」というのは、まだ神の国は来ていないのだから、熱心に祈り求めるべきだ、という意味になります。それに対して、「探せ」というのは、「神の国は既にある、それを探しなさい」という意味になります。同じようである全く響きが違います。つまり、イエスにとっては神の国はどこか遠いところ、あるいは天上にあるのではなく、「あなたがたのただ中にある」こと、すぐ近くに既にあるのだから、それを探しさえすれば良いのだ、ということになります。同じようである、全く意味が違います。

ルカ福音書 17 : 21 には〈神の国は、見える形では来ない。「ここにある」「あそこにある」と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ〉と書かれています。つまり、イエスにとって、神の国はどこか遠いところ、あるいは天上にあるのではなく、「あなたがたの間にある」こと、すぐ近くに既にあるのだから、それを探しさえすれば良いのだ、ということになります。何故なら、身近にあつて神の怒りで焼き払われるべき野のアザミやイバラの小さいのちの営みにも、神の支配があるのだ、ソロモンの栄華をはるかにこえる美しい装いを保っているではないか、またカーカー鳴いているあの呪われるべき穢れたカラスの生の営みにも神の支配が貫徹しているではないか、それと同じように、あなたがたは遠いところではなく、身近なところから神の国を探し出してご覧なさい、きっと見出すだろう、そうイエスはわたしたちに語りかけているのです。

「あなたがたの間に」というのは、関わりの中で生かされて在る〈いのち〉の中、という意味だと思います。神の国は、人と人との関係の中に、人と被造物（生き物など）との関係の中に、あるのです。わたしたちには、愛する家族が与えられています。深い友情に包まれた尊敬すべき知人・友人・仲間が与えられています。市民運動の信頼する仲間が与えられています。そこにこそ神の国はある、のではないのでしょうか。イエスは、〈二人または三人がわたしの名によって集まる場所には、わたしもその中にいるのである〉（マタイ 18 : 20）と言われました。大勢の人々の中、ではいけないのです。多数の中では、一人一人の個性が埋没してしまうからです。話し合うことができなくなってしまいますからです。

また、わたしたちの周りには、素晴らしい自然が与えられています。たまには、その花園や森の中を歩いて、神が「極めて良く造られた」被造物の〈いのち〉の営みに触れ、神の国の世界に触れたいものです。そこには、神の癒しがあります。そこで、人間性を回復することができるからです。

私たちも、イエスとともに、身近のところにある「神の国」を探し出す旅に出ようではありませんか。

## あ と が き

5, 6章くらいで終わることになると思って書き出しましたが、意外にも長い文章になってしまいました。詳しく読み込むと、この聖書の言葉は、私たちにいろいろの事柄を考えさせてくれるからですね。長くなったのは、次から次へと問題が発展してしまった結果です。

わたしは、これまでの教会・キリスト者が自然を軽視し、人間ばかりに目を向けてきたと感じて久しくなります。神の救済の対象を人間に限定してきたように思えてなりません。しかし、聖書を丹念に読むと、イエスが野の雑草やカラスが生かされていることに神の支配を見たこと、そこから、人間も「神の支配」の下にあって、その<いのち>を生かされていることを発見しました。その発見からイエスは、人を生かさない社会や思想と闘います。人の<いのち>を活かすのではなく、人を苦しめ束縛する律法主義を徹底的に批判しました。

旧約の創造物語からは、神が造られたものすべてを「きわめて良かった」と満足し、人間にその作られたものを大事にするようにと委託されたことを知らされました。これまでの教会は、聖書の読み方を間違っていたのです。自然破壊を後押しする思想的な根拠を提供してしまいました。そのことを中心に、この聖書の箇所即してわたしの考えを書いてみました。

問題は、聖書をキリスト教の教理から解釈してきた、そういう聖書の読み方にあると思います。確かに教理的な理解は大切です。それがないと、膨大な聖書の内容を的確に解釈することはできません。しかし、それはその教義が作られた時代の教会の強調点が反映されていますので、それに寄りかかりすぎると現代的な読み方が出来にくくなるのだと思います。ですから、時代とともに聖書の読み方も変わっていくのだと思います。環境問題が人類の生存をも脅かす問題になるなど、昔は誰が予測できたでしょうか。キリスト者と教会は、的確に時代を見据えて聖書を解釈し、預言者的役割を果たしてきたでしょうか。古めかしい教義から聖書を読むのではなく、自分の感性を大事にして読んでみたいと思ってきました。

この随想は、聖書からのわたしの発見と驚きを文章にしたものです。このような文章に不慣れなわたしには少々重い課題であり、わたしの思いが適切に表現できなかったのではないかと危惧します。それでも、2000年も前に書かれた書が、これほど現代の問題と深く関係していることに驚きを感じます。

わたしがこれまでに行ってきた主要な市民運動の対象は、巨大な終末処理場建設のために農地を奪われる農民であり、管理教育によって人権を侵害された子どもたちであり、破壊されようとしている自然です。皆、現代日本では弱者と言って良いでしょう。それらは、イエスが守ろうとした人々であり自然であることに気がついて下さったと思います。これらの活動はわたしのなかで一貫している、とまえがきで述べたのは、そういう意味です。

なお、表題を「野の花、空の鳥を見よ！」としましたが、本文で述べたことからすると、本来は「野のアザミ、空のカラスを見よ！」としなければなりません。でも、これはあまりに有名なイエスの言葉であり、広く流布しているものですから、それを尊重したというわけです。

## 【参考文献】

これらの論考には、本文中に逐一お名前を挙げませんでした。多くの方々の著書を参考にさせていただいています。30年間指導していただいた故・林 晃牧師には、説教を通して聖書の読み方などを懇切に指導していただきました。生きておられれば、真っ先に献呈したい方です。その他、村上 伸牧師、島 しづ子牧師、三好鐵雄牧師、大宮有博牧師からも、同様に大きな影響を受けました。最近読んだ上村 静著『宗教の倒錯』には深く感動しました。とくにイエスの発見、神の支配、関係の中で生かされてある<いのち>などの論考は、目からうろこが落ちるような驚きを持って読みました。この随想の基本構造は上村さんの書に負うところが大きいです。これらの方々に心から感謝いたします。主要な文献のみを下記に記しておきます。

- ・林 晃著『わたしたちの告白 林 晃牧師説教集』 日本キリスト教団 岡崎茨坪伝道所 開設10周年記念出版 1991年
- ・林 晃著『イエスの実像と虚像—山上の説教・マルコ福音書講解』 新教出版社 2000年
- ・林 晃著『神、私たち、そして今 創世記連続説教 ソナチネ』 日本キリスト教団 岡崎茨坪伝道所刊 2007年
- ・上村 静著『宗教の倒錯—ユダヤ教・イエス・キリスト教』 岩波書店 2008年
- ・上村 静著『キリスト教信仰の成立—ユダヤ教からの分離とその諸問題』 fad 叢書 NO.4 2007年
- ・柏井宣夫著『旧約聖書における創造と救い』 日本基督教団出版局 1990年
- ・荒井 献著『イエスとその時代』 岩波新書
- ・荒井 献著『「強さ」の時代に抗して』 岩波書店 2005年
- ・荒井 献著『イエスと出会う』 岩波書店 2005年
- ・荒井 献著『聖書の中の差別と共生』 岩波書店
- ・荒井 献著『新約聖書の女性観』 岩波書店 岩波セミナーブックス 27 1988年
- ・山口雅弘編著『聖餐の豊かさを求めて』 新教出版社 2008年
- ・B.W.アンダーソン著、高柳富夫訳『新しい創造の神学—創造信仰の再発見』 教文館 聖書の研究シリーズ 58 2001年
- ・本田哲郎訳『小さくされた人々のための福音、四福音書および使徒言行録』 新世社 2001年